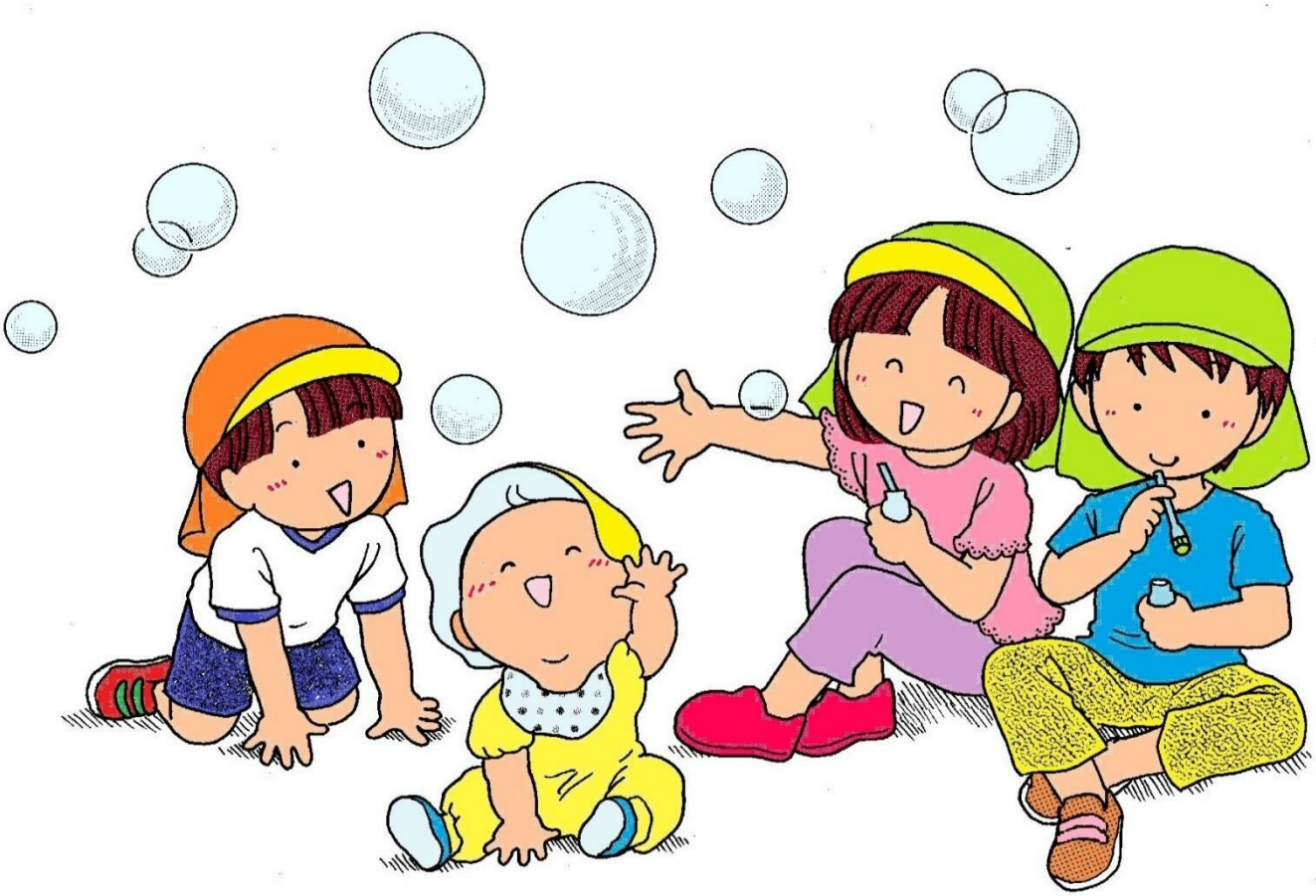
のびのび目黒っ子



令和元年　10 月
目黒区子育て支援部保育課

はじめに

昭和３６年 ４ 月に当時の東京都立保育園が特別区に移管され、区立保育園が産声を上げて５８年が過ぎました。この間目黒区立保育園では、社会情勢や家庭状況の変化に応じて、保育時間の延長（特例保育や延長保育）、産休明け保育の実施など保育サービスの拡大を行い、私立認可園とともに保育の質の維持向上に努めてきました。

平成２７年度からスタートした「子ども・子育て支援新制度」では、新たに「保育の必要性の認定制度」や区市町村の認可制度となる「地域型保育事業」が創設され、地域型保育事業の一つである小規模保育所も整備されるほか、病後児保育室や定期利用保育など多様な保育サービスが増えてきております。

近年では、待機児童対策として、各自治体が認可保育園の増設に取組みを進めておりますが、一方で、量の供給だけではなく、質の向上にも注目が集まってきています。

また、待機児童が減少局面にある現代では、保育園に通園していない家庭で育児を行っている世帯への支援もこれまで以上に重要となっております。

このような変革期にあっても、保育サービスを受ける主体は全て「目黒の子ども」であり、その成長する姿は共通のものです。そこで、これまで培ってきた目黒区の保育とは何か、そして目黒区が目指す「子どもの姿」はどのようなものかを改めて見つめなおすべきだと考えました。

この冊子は目黒区が目指す「子ども像」を明示し、年齢や発達段階に応じた目指すべき子どもの姿や保育の質を向上させるための、行政、園、保護者、事業者の役割をまとめたものです。

この冊子が、目黒区で働くすべての保育園職員及び保育関係者にとって有用なものになれば幸いです。

令和元年１０月
目黒区子育て支援部保育課

目　　次

１～２	目黒区の保育とは
３	目黒区の基本理念・子ども像
４～５	全体的な計画
６～７	子どもの発達に応じた経験させたい内容
８～１０	６か月未満
１１～１３	６か月～1 歳３か月未満
１４～１６	１歳３か月～2 歳未満
１７～１９	２歳
２０～２２	３歳
２３～２５	４歳
２６～２８	５歳
２９～３３	６歳（移行期）
３４～３５	特別支援保育
３６～３７	食育
３８～３９	健康教育
４０～４４	「目黒区全体の保育の質を高める基本的な取組み」

目黒区の保育とは

目黒区が保育を行う上で大切にしていることをまとめています。保育園における保育の基本は「保育所保育指針」にあり、この点は区立も民間も変わるものではありません。
区では保育指針を踏まえ、次に掲げる「保育の理念」を定めています。

保育の基本理念：**「健康で豊かな人間性を育む」**

一人ひとりを大切にする精神に基づき、自己肯定感や人との信頼関係を育み、様々な生活経験を積み重ねる中で、健康で豊かな人間性の基礎を培うことを理念とします。

≪基本理念に向けて保育を行っていく上で、重点とする三つの柱≫

１　肉体的な健康、生命の安全

- 家庭と連携して子どもの健康や生命を守り、成長を支え、生活に必要な基本的な習慣や態度を養う。
- 一人ひとりの子どもが健康で安全に過ごせる環境を作り、子どもの心身発達の基礎を養う生活リズムの大切さを啓発する。

２　精神的な健康、情緒の安定、豊かな感性

- 子どもの状態や発達過程を的確に把握した上で、一人ひとりの存在を尊重し、自己肯定感を育む。
- 子どもの気持ちを受容し共感しながら、人間関係を築く基となる人への信頼感を育み、情緒の安定を図る。
- 自然に親しむ、体を動かす、表現するなど様々な活動を通して感じた思いを大人や仲間と共感し、豊かな感性を育む。

３　公平、平等な保育

- 子どもの心身の発達、生活習慣や文化、国籍、家庭の事情や考え方などの違いにかかわらず、全ての子どもの人権を尊重し、成長に応じた支援を行う。
- 固定観念にとらわれることなく、生活の中で出会う様々な違いを子どもたちが理解し、互いに尊重する心を育む。

≪子どもの成長・発達のために大切にしている保育の視点≫

１　子どもの生きる力を育む

- 様々な生活体験を積み重ねることを大切にして、良いこと悪いことの判断ができ、自分を律することができる力を養う。
- 健康や安全など生活に必要な習慣や態度を身につけさせるとともに、考えたり工夫したりする経験を大切にして、思考力や認識力を養い、子どもが自信をもって生活する力を育む。

２　自己肯定感を育む

- 生活や遊びの中で一人ひとりの子どもの気持ちを受け止め、認めていき、自分が大切にされていると感じる経験を大切にする。
- 子どもが周囲から認められる安心感を醸成し、自己を主張する力や自分自身を認めていく心を育む。

３　意欲・主体性を育む

- 生活や遊びの体験から興味関心を引き出し、探究心や好奇心を育むとともに、達成したときの満足感や達成感から、子どもの意欲につなげる。
- 遊びの環境を作り適切な援助を行い、子どもが自分の意志で判断し、主体的に行動する力を育む。

４　環境を活かし、創意工夫した保育を実践する

- 限られた環境の中で自然を大切にし、保育の中に取り入れることで五感を育て、子どもの興味関心を広げる。
- 狭い園庭や園庭のない施設においても、子どもが楽しく体を動かすことができる環境を構成し、工夫しながら保育を行う。
- 室内外を問わず、安心できる環境の中で、既製の遊具にとらわれず遊具を整え発達に合わせた豊かな遊びを保障する。

目黒区の基本理念・子ども像

（基本理念）健康で豊かな人間性を育む

一人ひとりを大切にする精神に基づき、自己肯定感や人との信頼関係を育み、様々な生活経験を積み重ねる中で、健康で豊かな人間性の基礎を培うことを理念とします。

【子ども像】

◆心も体も元気な子ども

・身近な大人との愛着関係の中で、安心して過ごす

・自分らしく伸び伸びと活動し、充実感を味わう

・健康や安全な生活に必要な習慣や態度を身につける

◆自分で考えて行動できる子ども

・いろいろな体験をし、興味や関心を広げる

・遊びや生活を通して考え工夫することが出来る

・好きな事を意欲的に取り組み、達成感を味わう

◆感性豊かな子ども

・自然や身近なことがらに興味、関心を持つ

・感じた事、考えた事を自分らしく表現する

・発見し、考える体験を積み重ねる

◆思いやりのある子ども

・自分が認められる事で友だちを認め、自分も相手も大切にする

・人とのかかわりを楽しむ

・自然やものを大切にする

教育及び保育の内容に関する全体的な計画

基本理念	健康で豊かな人間性を育む	保育目標	1. 心も体も元気な子ども 2. 自分で考えて行動できる子ども 3. 感性豊かな子ども 4. 思いやりのある子ども	保育方針	・子どもが自発的、意欲的に経験できるよう0歳から就学までの系統立てた保育を実践する。子どもの発達を理解し、環境を整え、遊び込めるように工夫する。 ・子どもの心身の発達を促し、健康で安全な生活に必要な生活習慣が身につくようにする。健康教育を通して自分の身体に興味を持ち、自ら考え行動できる力を育む。 ・子どもの成長に必要な栄養バランスのとれた給食を提供する。食材に触れる経験や栽培活動・調理活動を通して食への関心を育てる。 ・地域に保育園を開放し、園の行事など地域の子ども達と共に過ごす。
子どもの教育及び保育目標		0歳児	生理的欲求を満たし安心して過ごす	3歳児	身近な友達と一緒に自然等の環境に積極的に関わり、意欲を持って活動する
		1歳児	行動範囲を広げ探索活動を盛んにする	4歳児	友だち関係が深まり、仲間と共に感情豊かな表現をする
		2歳児	みたてやつもりと想像力を広げながら遊ぶ	5歳児	集団生活の中で自立的、意欲的に活動し、体験を積み重ね自信をもって行動する

保育所保育に関する基本原則／役割・目標	保育の方法／環境	保育所の社会的責任	養護に関する基本的事項	保育の計画及び評価	幼児教育を行う施設として共有すべき事項	小学校との連携
・児童福祉法に基づき、保育を必要とする子どもの保育を行い、健全な心身の発達を図る。 ・保育に関する専門性を有する職員が、養護及び教育を一体的に行う。 ・保護者支援及び地域の子育て支援等を行う。	・健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を整える。 ・一人ひとりの発達過程に応じ、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育する。 ・保護者を理解し適切に援助する。	・子どもの人格を尊重し保育を行う。 ・地域社会との交流や連携を図り、保育の内容を適切に説明する。 ・個人情報を適切に取り扱う。 ・保護者の苦情解決を図るよう努める。	子どもにとって保育所が健康や安全が保障され快適な環境となるようにする。また保育士等との信頼関係をよりどころとして情緒的な安定が図られ安心できる場となり養護及び教育を一体的に行う。	・保育の目標を達成するため、方針や目標に基づき、子どもの発達過程を踏まえた保育の内容が展開されるよう全体的な計画を作成する。また、全体的な計画に基づき指導計画、保健計画、食育計画を作成する。 ・指導の過程を振り返りながら園児の理解を進め、一人一人の良さや可能性などを把握し、指導の改善に生かす。	・生涯にわたる生きる力の基礎を培うため、保育の目標を踏まえ、資質・能力の3本柱を一体的に育むよう努める。 ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、ねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して資質・能力が育まれている子どもの小学校就学時の具体的な姿であり、保育士等が保育を行う際に考慮する。	・小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることを配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う。 ・育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教師との意見交換、研修会で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、小学校との円滑な接続に努め、子どもの育ちを支えるための保育所児童保育要録を小学校へ送付する。

養護

生命の保持

・(生命の保持)
子ども一人ひとりが、快適にかつ健康で安全に過ごせるようにするとともに、その生理的欲求が十分に満たされ、健康増進が積極的に図られるようにする。
(0歳児)
生理的要求の充実を図る
(1歳児)
生活リズムの形成を促す
(2歳児)
適度な運動と休息の充足を図る
(3歳児)
健康的生活習慣の形成を促す
(4歳児)
運動と休息のバランスと調和を図る
(5歳児)
健康、安全への意識の向上を図る

情緒の安定

・(情緒の安定)
子ども一人ひとりが安定感をもって過ごし、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。周囲から主体として受け止められながら育ち、自分を肯定する 気持ちが育まれていくようにし、くつろいで共に過ごす中で、心身共に癒やされるようにする
(0歳児)
・応答的な触れ合い
・情緒的な絆の形成
(1歳児)
・豊かなやり取りによる心の安定
(2歳児)
・自我の育ちへの受容と共感
(3歳児)
・主体性の育成
(4歳児)
・自己肯定感の確立と他者の受容
(5歳児)
・心身の調和と安定により自信を持つ

教育

乳児期(三つの視点)		5領域	満1歳～満3歳未満(5領域)	満3歳以上(5領域)
健やかに伸び伸びと育つ	**身体的発達／健やかに伸び伸びと育つ** 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う。] **ねらい** (1)身体感覚が育ち、快適な環境に心地よさを感じる。 (2) 伸び伸びと体を動かし、這う、歩くなどの運動をしようとする。 (3)食事、睡眠等の生活のリズムの感覚が芽生える。 **【健康】** ・温かい触れ合いの中で心と体が発達する ・愛情豊かな受容のもとで生理的、心理的欲求を満たし心地よく生活する	健康	[健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。] **ねらい** (1) 明るく伸び伸びと生活し、自分から体を動かすことを楽しむ。 (2) 自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣に気付き、自分でしてみようとする気持ちが育つ。 (1歳児)歩行の確立により行動範囲が広がる (2歳児)排泄の確立 (2歳児)運動、指先の機能が発達する	[健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。] **ねらい** (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。 (3歳児)意欲的に活動する ・基本的な生活習慣の確立 (4歳児)健康に関心をもつ ・全身の協応運動 (5歳児)健康増進や安全への理解を深めながら意欲を持って行動する
身近な人と気持ちが通じ合う	**社会的発達／身近な人と気持ちが通じ合う** [受容的・応答的関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。] **ねらい** (1)安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。 (2)体の動きや表情、発声等により、保育者等と気持ちを通わせようとする。 (3)身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。 **【人間関係】【言葉】** ・特定の大人との深い関わりによる愛着心を持つ ・発声や喃語等への応答を通じて言葉の理解や発語の意欲が育つ	人間関係	[他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。] **ねらい** (1) 園生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる。 (2) 周囲の園児等への興味・関心が高まり、関わりをもとうとする。 (3) 園の生活に慣れ、きまりの大切さに気付く。 (1歳児)周囲の人への興味、関心が広がる (2歳児)自己主張を表出する (2歳児)友達との関りが増える	[他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。] **ねらい** (1) 園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。 (3歳児)道徳性が芽生える (4歳児)仲間との深いつながりが持てる (5歳児)社会性の確立と自立心が育つ
		環境	[周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。] **ねらい** (1) 身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ。 (2) 様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。 (3) 見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。 (1歳児)好奇心が高まり、探索活動を盛んにする (2歳児)自然事象に積極的に関わる	[周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。] **ねらい** (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。 (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。 (3歳児)身近な環境に積極的に関わろうとする (4歳児)社会事象に関心が高まる (5歳児)社会、自然事象に関心が深まり、生活に取り入れる
		言葉	[経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする態度や意欲を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。] **ねらい** (1) 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。 (2) 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。 (3) 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。 (1歳児)言葉を獲得し話し始める (2歳児)言葉のやり取りを楽しむ	[経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。] **ねらい** (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。 (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。 (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育者や友達と心を通わせる。 (3歳児)言葉を使ったり、楽しさに気づく (3歳児)生活の中での必要な言葉を理解し言葉を使う (4歳児)伝える力、聞く力を獲得する (5歳児)文字や数字を獲得することで遊びが発展する
身近なものと関わり感性が育つ	**精神的発達／身近なものと関わり感性が育つ** [身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。] **ねらい** (1)身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。 (2)見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。 (3)身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。 **【環境】【表現】** ・身近な環境への興味を持つ ・生活や遊びの中で様々なものにふれ、音・形・色・手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。	表現	[感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。] **ねらい** (1) 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。 (2) 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。 (3) 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。 (1歳児)いろいろな素材に触れて楽しむ (2歳児)見立てつもりあそびを楽しむ	[感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。] **ねらい** (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。 (3歳児)自由な表現と豊かな感性が育つ (4歳児)豊かな感性による表現ができる (5歳児)創造力豊かに表現をする (5歳児)感動を共有できる

幼児期の終わりまでに育ってほしい事項　10項目

健康な心と体 【健康】	保育園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心 【人間関係】	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性 【人間関係】	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え 【人間関係】	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり 【人間関係】	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、保育園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え 【環境】	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重 【環境】	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 【環境】	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い 【言葉】	保育士や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現 【表現】	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

育みたい資質・能力

「知識及び技能の基礎」	豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする **「知識及び技能の基礎」**
「思考力・判断力・表現力等の基礎」	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする **「思考力、判断力、表現力等の基礎」**
「学びに向かう力・人間性等」	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする **「学びに向かう力、人間性等」**

※小学校教育との接続に当たっての留意事項
保育園の教育及び保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換を設 け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、保小連携で円滑な接続を図るよう努めるものとする。

子どもの健康支援	食育の推進	環境及び衛生管理並びに安全管理	災害への備え	子育て支援	施設長の責務	職員の研修
・健康及び発育状態の定期的、継続的な把握 ・園医による検診ー内科・歯科(年2回)耳鼻科(年1回)0歳児の健康診断(月4回) ・登園時及び保育中の状態観察、または異常異常が見られた時の対応 ・心身の状態等を観察し、保護者に不適切な養育の兆候が見られる場合には関係機関と連携し、適切な対応をする。 ・年1回の職員の健康診断及び毎月の細菌検査提出	・栄養バランスを考えた給食の提供 ・食育活動及び野菜栽培の実施 ・行事食の提供 ・保護者の給食試食の実施	・施設内外の設備、用具等の清掃及び消毒等、安全管理及び 自主点検 ・子ども及び職員の清潔保持 ・感染予防対策マニュアルの作成と実施及び保護者との情報共有 ・重大事故防止、事故防止マニュアルを作成、共有 ・不審者対応訓練の計画及び実施	・毎月の避難訓練の実施(火災、地震、不審者対応) ・消火訓練の実施 ・緊急時対応の、具体的内容及び手順、職員の役割分担、避難訓練計画に関するマニュアルの作成 ・年2回、消防設備点検 ・防火設備、避難経路等の定期的な安全点検の実施	・教育及び児童福祉としての保育並びに子育て支援にかかわる地域の関係機関等と連携が図られ、子どもの成長に気づき、子育ての喜びが感じられるよう子育て支援に努める。 ・保護者の育児不安等が見られる場合は支援し、保護者に不適切な養護または虐待が疑われる場合には関係機関と連携し適切な対応を図る。	・施設長は保育所の役割や社会的責任を遂行するために、法令等を尊守し、保育所を取り巻く社会情勢を踏まえ、施設長として専門性の向上に努め、保育の質及び職員の専門性の向上のために必要な環境の確保に努める。 ・自己評価や第三者評価の実施、利用者の意見等を通して、保育の質の向上を図る。	・職員は自己評価に基づく課題等を踏まえ、研修等を通じてそれぞれの職務内容に応じた専門性を高める。 ・保育所職員に求められる専門性を理解し、体系的な研修計画を作成する。

子どもの発達に応じた経験させたい内容

	身のまわりへと興味が広がる０歳児	興味や関心が広がる１歳児	「じぶんで、じぶんで」を主張する２歳児
発達の主な特徴	・首がすわり、手足の動きが活発になり、その後寝返り腹這いなどの全身の動きが活発になる ・座る、這う、立つ、伝い歩きといった運動機能が発達し、腕や指先を意図的に動かせるようになる周囲の人や物に興味を示し探索活動が活発になる ・特定の保育者との関わりの中で情緒が安定し、あやしてもらうと喜び、やり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる ・自分の意思や要求を身振りなどで伝えようとし、保育者の声かけや簡単な言葉がわかるようになる ・食事は離乳食から幼児食へ徐々に移行する	・歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることで、身近な人や身の回りのことに自発的に働きかけていく ・歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める ・物をやり取りしたり取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる ・保育者の言うことが分かるようになり、自分の気持ちを親しい保育者に伝えたいという欲求が高まる	・歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする ・排泄の自立のための身体機能が整ってくる ・発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる ・盛んに模倣し、物事の間の共通性を見いだすことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、保育者と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる
養護	・一人ひとりの健康状態、発育状態を把握し、心地よく過ごせるようにする ・お座りや腹ばいになるなど活動範囲が広がるので、安全面や室内の清潔に留意する ・興味や発達に合わせて、十分に遊んだり、探索できる環境を整える	・歩くことが楽しく行動範囲が広がるので、安全面には十分配慮する ・自分でしようとする気持ちが十分満たされるような環境を用意し、自分でできる喜びが味わえるようにする ・友だちとの関わりが多くなり、自分の思いをうまく伝えられない場面では保育者が言葉を添え、互いの心を結びつける	・自分でしようとする気持ちを大切にしながら、必要に応じてさりげなく援助する ・一人ひとりの気持ちを受容し、保育者が仲立ちをして友たちとの関わり方を知らせる

	教育　　乳児期（三つの視点）		教　育　　満１歳～満３歳未満（５領域）
健やかに伸び伸び育つ	・安心して入眠したり目覚める。眠りが安定すると、ほぼ決まった時間に眠り、機嫌よく目覚める。 ・一人ひとりの状態に合わせた授乳を行い、離乳を進めていく中で、味や形態や様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しむ ・一人ひとりの発育に応じて、這う、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。 ・おむつ交換や衣服の着脱などを通じて、清潔になることの心地よさを感じる	健康	・いろいろな食べ物に興味を持って食べようとする ・スプーンを使って保育者に手伝ってもらったり、自分で食べようとする ・排尿すると言葉や仕草で教える ・一定時間眠る ・歩行が安定してきて行動範囲が広くなり、歩く、走る、上る、下りるなど全身を使った遊びを十分に楽しむ	・楽しい雰囲気の中で様々な食べ物を食べようとする ・食べ物の種類によりスプーン、フォークなどを使って食べる ・保育者に見守られ、トイレでの排泄に慣れる ・パンツやズボン、かぶる服の着脱の仕方を知り、一人でやってみようとする ・全身や手、指の動作が発達し、走る、跳ぶ、蹴る、ぶら下がるなど、様々な運動遊びをする
身近な人と気持ちが通じ合う	・見慣れない場所や人への不安感で人見知りが強くなり、いつも世話をしてくれる人に愛着行動を示し、自分から関わる。 ・保育者の身振りや話しかける言葉を少しずつ理解し、喃語や気持ちを指さしや言葉で伝えようとする ・生活や遊びの中で、自分から身近な人の関わりに気づき、親しみの気持ちを表す ・保育者等の語りかけや、発声や喃語等へのやり取りを通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ ・保育者の温かい受容的な関わりを通して、自分を肯定する気持ちが芽生える	人間関係	・保育者との安定した関係の中で、共に過ごす喜びを味わう ・生活や遊びの中で、保育者を仲立ちとして簡単な単語や物のやり取りをする ・保育者と触れ合ったり話をすることを通じて、気持ちを通わせる ・表情や身振りなどで自分の気持ちを表したり、簡単な言葉を使ったりする。	・一人遊びを楽しみながら、保育者が仲立ちとなり友達にも関心を持って関わろうとする ・保育者や友達と簡単なごっこ遊びを楽しむ ・自己主張が強くなり、自分がしてほしい事を身振りや言葉で伝える ・自分で表した気持ちや欲求を受け止めてもらうことを喜ぶ ・見立て遊びやつもり遊びが十分できるようになり、友達と関わって遊ぶ
		環境	・戸外の自然に触れながら探索活動を十分に楽しむ ・様々な素材に触れ、めくる、ひねる、つまむ、ちぎる、押すなど指先を使った遊びをする	・身の回りの物を使い、発見したり、工夫して遊ぶ ・タオルや帽子をフックにかけるなど、簡単な身の回りのことを保育者と一緒にする
身近なものと関わり感性が育つ	・身近な玩具や絵本などの身の回りのものに対する興味や関心を持つ ・生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気づき、感覚の働きを豊かにする。 ・保育者と一緒に様々な色彩や形のものや絵本をみる ・玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、ひっぱるなど、手や指を使って遊ぶ ・ふれあい遊びを喜び、歌に合わせて手足や体を動かして遊んだりする	言葉	・保育者の話しかけや絵本を読んでもらうことにより、言葉を理解したり、簡単な単語を使ったりする ・指差し、身振り、片言などを盛んに使うようになり、二語文を話し始める	・保育者を仲立ちとして、生活や遊びの中で簡単な言葉でのやり取りを楽しむ ・保育者の話しかけや絵本を通じて、リズムのある言葉や繰り返しの言葉に興味を持ち、自分で言うことを楽しむ ・物に名前があることがわかり、知っている物の名前を指して喜んだりする
		表現	・砂や水、土、粘土に触れて感触を楽しむ ・経験したことを再現して遊ぶ ・歌遊びを喜び、歌に合わせて手足や体を動かして遊んだりする する	・ちぎったり、破いたり、貼ったり、なぐり描きをする ・興味のあることや経験したことを自分で表現して遊ぶ ・歌遊びを喜び、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして遊んだりする

子どもの発達に応じた経験させたい内容

	何でもやりたい意欲いっぱいの３歳児	生き生き、個性豊かな４歳児	育ちあい、たのもしい５歳児
発達の主な特徴	・基本的な生活がほぼ自分で出来るようになる ・基本的な運動機能が発達し、話し言葉が豊かになり会話を楽しむようになる ・自分の思いを主張しながらも友だちと同じ場所で遊んだり簡単な集団での遊びを楽しんだりするようになる	・体のバランスが取れるようになり、協応動作も上手になる ・周囲の環境に強い関心を持ち、友達と発見し合ったり、工夫し合ったりして遊びが豊かになる ・少しずつ自分の気持ちを抑えたり我慢できるようになってくる	・生活や遊びに見通しを持ち、社会生活に必要な力を身につけて行動できるようになる ・全身運動や細かい指先の動きが滑らかで巧みになる ・知識や経験をいかし、工夫して友達と遊びを発展させていくようになる ・人の役に立つことを嬉しく感じたり、仲間の中の一人としての自覚がうまれる
養護	・自分を出せるように一人ひとりの気持ちを受けとめ、安定して過ごせるようにする ・物事に意欲を持って取り組むことを大切にし、できたことを褒め、心の安定を図る	・一人ひとりの気持ちを受けとめ、信頼関係を築き、安定した生活ができるようにする ・応答的なやり取りをすることで安定感を持ち、友だちを思いやる気持ちが育つようにする	・いろいろな活動の中で達成感や自信がもてるようにその成長を認めていく ・周りにいる人たちの存在に気づいて考えたり、尊重しなければならないことを伝えていく ・健康に過ごす習慣を身につけ、自ら生活リズムをつくっていけるようにする
		教　　育	満３歳以上（５領域）
健康	・楽しい雰囲気の中ですすんで食べようとする ・身の周りの清潔や衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分からしようとする ・様々な遊びに興味を持ち保育士や友達と一緒に体を動かす楽しさを味わう ・保育者に援助されながら、危ない場所や遊び方を知り、気をつけようとする	・食べることを楽しみ、食べ慣れない物や嫌いな物でも少しずつ食べようとする ・自分の健康に関心を持ち、うがい、手洗いや衣服の調整などをすすんで行う ・遊具、用具などを使い、様々な動きを組み合わせて積極的に遊ぶ ・日常生活の決まりや危険なことが分かり、約束を守って行動する	・健康と食べ物の関係に関心を持つ ・自分の身の回りの始末や片付けの必要性がわかり見通しを持ってすすんで行う ・うがいや手洗いなど健康生活に必要な活動を理解しすすんで行う ・様々な運動遊具を使い工夫しながら友達と一緒に色々な運動や遊びをする ・危険なものや場所、遊び方が分かり、判断して安全に気をつけて遊ぶ
人間関係	・自分からやってみて、できた喜びを味わう。 ・生活や遊びの中で簡単な決まりがある事を知り、それを守ろうとする ・友達と一緒に遊ぶ中で友達がしている事や動きや言葉に関心を持ち、相手にも様々な思いがあることを感じる ・保育者や友達と一緒に活動することを喜ぶ	・仲の良い友達と思いや考えを出し合いながら楽しく遊ぶ ・保育者や友達の言っていることや考えていることを受け止めて行動しようとする ・簡単なルールを守って楽しく遊ぶ ・異年齢の子どもに親しみを持ったり、すすんで遊んだりする ・園内の大人や地域の方などに親しみを持ち、一緒に楽しく活動する	・友達と共通の目的を持って活動を進める中で、相手の思いを受け入れ協力して物事をやり遂げる充実感を味わう ・やってよい事と悪い事が分かり、考えながら行動する ・自分達で遊び方や決まりを作り、守って遊ぶ ・身近な友達との関わりを深めると共に異年齢の友達とも関わり、思いやりや親しみを持つ ・自分の生活に関係の深い地域や高齢者などいろいろな人に親しみの気持ちを持つ
環境	・身近な草花や小動物、自然現象に興味を持って関わる。 ・身近な遊具や用具に関心を持ち、自分達で自由に使ったり遊んだり、感触を楽しんだりする。 ・生活や遊びの中で数や量などの違いに気付き、興味を持つ ・自分の物、他人の物、共同の遊具などの区別が分かり大切にしようとする。	・自然の美しさに触れて感動したり、自然物を使って遊ぶことを楽しんだりする。 ・身の回りの物の色、形などに興味を持ち、集める、分ける、組み合わせるなどしながら遊ぶ ・重い、軽い、固い、軟らかいなどの物の性質に気づく ・身近な遊具の使い方が分かり、様々な場面で積極的に使おうとする ・具体的な物を通して数や量などに関心を持ち、簡単な数の範囲を数えたり比べたりすることを楽しむ	・季節の変化や自然・社会の事象など身近に起こる様々な事やものに興味・関心を持ち考えて試したり調べたりする ・様々な図形や数、量、長短などに興味を持ったり、物の性質や仕組みについて考えたり気付いたりして遊びに生かす ・生活や遊びの中で文字や数、標識等に触れ、読んだり書いたり、遊びに取り入れる。 ・目的や課題を自分の事として受け止め、これまでの経験を生かし工夫して取り組む
言語	・親しみを持って保育者の話を聞いたり、困った事やして欲しい事を言葉で伝えたりする ・身近な生活の中で必要な言葉に気付き、自分も使ってみる ・挨拶などをする気持ちよさを感じる ・絵本や紙芝居などを繰り返し見たり聞いたりすることを楽しむ	・保育者や友達の話について親しみをもって聞く ・親しみ持って挨拶をしたり、保育者や友達と会話を楽しんだりする ・絵本や紙芝居などの内容やストーリーに興味を持ち、イメージを広げて楽しむ	・自分の思いが相手にわかるように、話し方や言葉を考え伝えることを楽しむ ・聞いていて心地良い言葉や美しい言葉があることに気付き、様々な体験を通しイメージ豊かに言葉で表現する ・絵本や物語、詩などに親しみ、想像する楽しさを感じながら表現し、言葉の面白さや美しさに興味を持つ ・すすんで挨拶をしたり、みんなの前で話しをしたりする
表現	・身近な素材や用具を使って好きなように描いたり作ったりして楽しむ ・様々な人物になって遊んだり、友達とやり取りしながらごっこ遊びを楽しむ ・保育者と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かして遊ぶ ・発見した事や感動した事を保育者や友達に伝える	・様々な素材や用具を使って、自分なりに工夫して表現することを楽しむ ・音楽に親しみ、友達と一緒に聴く、歌う、体を動かす、簡単なリズム楽器を鳴らすなどを楽しむ ・絵本の中の人や身近な動物になりきって遊んだり、音楽やリズムに合わせて動くことを楽しむ	・様々な素材や用具を利用して、自分なりに描いたり作ったりすることを楽しむ ・感じた事や思った事、物語のストーリーなど、友達と一緒にイメージを出し合って描いたり作ったりして遊びを進めることを楽しむ ・音楽に親しみ、聴いたり、歌ったり踊ったり、曲に合わせて楽器を使ったりする楽しさを味わう ・自分の想像した物を体の動きや言葉などで表現したり、演じたりして楽しむ

６か月未満

～たっぷり飲んで、ぐっすり眠れるように～

発達の主な特徴

【運動機能】

生後４か月頃には首がすわり、手足の動きが活発になる。５か月頃には目の前の物をつかもうとしたり、手を口に持っていく。また親指が外側に出て手に触れた物を握ることができるようになる。寝返りもできるようになり、腹這いにすると肘で上半身を支えることができるようになってくる。仰向けから上体を引き起こすと同時に頭も上がり、両足も腹部に引き寄せるなど全身の動きが活発になり、自分の意思で体を動かせるようになる。

【感覚機能の発達】

視覚や聴覚の発達がめざましく、生後３か月頃には周囲の人や物をじっと見つめたり、見回したりする。周りで物音がしたり大人が話している声がすると、その音や声がする方を見るようになり、音の出るおもちゃを追視するようになる。

【人との関わり】

快、不快の感覚が芽生え、空腹になったり、おむつが汚れると目覚め、泣いて表現する。生理的欲求が満たされると情緒が安定してくる。

保育者の優しい声や言葉かけ、まなざし、笑顔での働きかけなどを通し、抱かれて泣きやんだり、安心した表情になる。身近な人の顔が分かり、あやしたり、話しかけられたりするとよく笑う。４か月頃には表情も豊かになり、声を出して笑うようになる。「あーあー」「あぶぶー」など声を出すようになり、喃語で人と関わる楽しさを味わうようになる。また、笑ったり泣いたり、様々な感情表現をする。

６か月未満

事例１　「気持ちいいね」

　沐浴をするために保育者に抱かれ浴槽に入れてもらうＡ。笑顔だった表情が湯に入ると緊張し、保育者の顔を見つめた。保育者は「きれいにしようね」「気持ちいいね」と声をかけながら体や顔を拭いた。すると、少しずつ表情が和らぎ、握りしめていた両手が段々と開いていった。手足も動かし始め湯の感触を心地良く感じているようであった。沐浴を終えようとする頃には両手で水面を叩くまでになっていた。沐浴を終え「気持ち良かったね」と声をかけながら着替えを始めようとすると、「あーあー」と声を出していた。

事例２　「じーっと見つめて・・・なんだろう」

　仰向けで機嫌よく過ごしているＡ。「Ａちゃん」と声をかけながら目の前で保育者が歌に合わせて布を振ると、じっと見つめて「んーんー」と声を出し、保育者と目が合う。布の動きや揺れを追視しながら楽しんでいる。

【保育者のかかわりのポイント】

・子どもの（気持ちいい、眠い、抱っこしてなど）思いを汲み、優しく丁寧に声をかけ思いを言葉にして応えていくことが大切である。
　担当保育者が子どもの要求を理解し「おなかがすいたね」「おむつが濡れたね」等、応答的に関わる中で愛着関係を育んでいく。
・安定を図るために一人ひとりの生活リズムを大切にし、家庭と連携を取りながら授乳時間や睡眠時間を把握し、保育園生活に少しずつ慣れていくようにする。
　担当保育者と関わり、よく食べ、よく眠り、よく遊ぶ環境を整えて心地良く過ごせるようにする。
・４か月を過ぎる頃に保育者が布を左右に動かしてみせると、子どもは追視を始める。手と手、手と口の協応ができ始めるため、触ったり、振ったりして追視を楽しめる玩具を用意し、興味関心を引き出していく。子どもの反応に共感し合うことが大事である。

６か月未満

事例３　「あやされてご機嫌」

仰向けで遊んでいるＡ。保育者が目を見て「Ａちゃん」と笑顔で声をかけると「あーあー」と声を出し、応える。ガラガラを振るとそれを目で追い、上半身を持ち上げるように両手を伸ばしてガラガラを取ろうとする。保育者がにっこり笑ってもう一度ガラガラを振りながら「Ａちゃん、ガラガラ好きなのね」と声をかけると「ん～」と声を出し、目が合う。保育者に繰り返しあやされ、それに笑顔で応えやり取りを楽しみながら機嫌よく過ごした。

事例４　「安心して遊ぶ気持ち」

保育者や人の顔をじっと見つめるようになり、表情が柔らかくなったＡ。保育者が優しい声で「いない　いない　ばあ～」の手遊びや歌などで繰り返しあやすと、保育者の目を見て笑い返す。歌に合わせるように手足を動かし機嫌よく過ごす。また、隣りで遊んでいたＢと見つめ合って心地よさそうな表情をしている。

【保育者のかかわりのポイント】

- 保育者はその子の思いに寄り添いながら、代弁したり、微笑んだり、優しく声をかけたりして共感できるように関わり、周りへの興味を持てるようにする。
- 次第に周りにある物に興味を持ち、玩具を見る、触る、舐める、噛む、しゃぶるなどで感覚や器官が発達する時期なので、こまめに玩具を清潔にして遊べるようにする。見る、聞く、掴む、引っ張るなどの玩具を用意し、豊かな感覚運動を経験できるようにしていく。遊んでいる子どもの様子を見守りながら、動きを妨げないように配慮し、運動する力が十分発揮できるように援助していく。

６か月～1 歳３か月未満

～身の回りへの興味の芽生えを大切に～

発達の主な特徴

【運動機能】

這う、座る、立つ、伝い歩くなどを経験して一人で歩くようになる。様々な刺激を受けながら生活空間を広げていく中で、身近な環境への興味関心が広がり好奇心が旺盛になる。

【活発な探索活動】

自由に手が使えるようになると触ってみたい、関わってみたいという意欲が高まる。左右の手指を操作して物を持つことが上手になる。様々な物に手を伸ばし、次第に両手に物を持ち叩き合わせる。手のひらと指を使って握り、親指と人差し指で摘む動作に変わっていく。歩行ができるようになると移動が自由になり、いつも関わってくれる大人との信頼関係による情緒の安定を基盤に探索活動が活発になる。

【愛着と人見知り】

いつも自分の世話をしてくれる人、声をかけてくれる人などの顔が分かる。特定の保育者の応答的な関わりによって情緒的な絆が深まり、あやしてもらうと喜び大人とのやり取りを盛んに楽しむ。初めての人や知らない人に対しては人見知りをするようになり、特定の大人との愛着関係が育まれてくる。

【言葉の芽生え】

身近な大人に自分の意思や欲求を声に出したり、喃語や身振りなどで伝えようとしたりする。徐々に簡単な言葉の意味が分かるようになり、生活の中で大人と同じ物を見つめ、同じ物を共有することを通して盛んに指差しをするようになる。

【離乳食の開始から完了期へ】

消化液の分泌が多くなると離乳食が開始される時期になる。母乳やミルクなどの乳汁栄養から滑らかにすり潰した状態の食べ物を経て、徐々に形のある食べ物を摂取するようになる。舌を上下に動かせるようになり、モグモグと口を動かす。少しずつ食べ物に親しみながら咀嚼や嚥下を繰り返し幼児食へ移行する。自分の手で食べたいという意欲が芽生え、食べ物に手を伸ばして食べる。目で確かめたりしながら口へ運ぶなど自分の意思で食べる喜びを感じるようになる。

６か月～1 歳３か月未満

１期　「もう少し・・・できたー」

仰向けで玩具を手にして遊んでいたMが持っていた玩具を落としてしまう。落としてしまった玩具を探しているのか、頭を左右に動かしていると違う玩具が目に入った。手足を動かし玩具を取ろうと盛んに寝返りをしようとしているが、もう少しのところで寝返りができない。保育者が声をかけながらMの足の動きに合わせてお尻を少し支えてあげると寝返りができた。「できたね」と保育者が声をかける。Mは保育者の声かけにびっくりした表情だったが、保育者が喜んでいるのが分かり、玩具に手を伸ばし嬉しそうに笑った。

【保育者のかかわりのポイント】

・寝返りをしようとしている子どもの様子を見守りながら子どもの姿勢の移動や動きを妨げないように援助する。子どもの手足の動きに合わせて保育者が玩具で誘ったり言葉がけしたり意欲を引き出すように働きかけ、子どもが遊びの中で動きの獲得ができるようにしていく。
・安全で清潔な玩具、日用品等を周りに用意し環境を整え自由に体の移動ができるようにし、その動きや遊びがゆったり楽しめるように共感したり援助していく。

２期　「安心できる保育者と」

食事コーナーから担当保育者の声が聞こえると甘えて泣き始めるＴ。一緒に遊んでいた保育者が抱き上げ「次は、Ｔちゃんの番だね。〇〇先生、食事のお支度してくるからね。」「先生来たら、ごはんたべようね。」と声をかける。食事コーナーの方を振り返り担当保育者を探す。保育者が食事の支度を終え、Ｔを迎えに行き「一緒にごはん食べようね」とやさしく声をかける。Ｔはにっこり笑って手を伸ばし担当保育者に抱っこされて食事に向かった。

【保育者のかかわりのポイント】

・日々の関わりの中で自分を受け止めてくれる保育者との関係が積み重なり、顔はもちろん声も識別できるようになり安心できる存在になってくる。感情の発達と共に大人への愛着行動をはっきりと表す。すぐに要求に応えられない時は優しく言葉をかけて、その後じっくり向かい合い応えていく。
・担当保育者との関係が強く結びつく大切な時期である。そのためにクラスの職員同士が個々の対応を共通に理解して同じ思いで見守っていけるようにする。

６か月～1 歳３か月未満

３期　「おいしいね　もっとたべたい」

食事に興味を持ち始めたが、まだ手づかみ食べをしようとしないＡ。自分で手を伸ばし器を触って食べたい物を保育者に伝える。「これ食べたかったのね」と保育者が声をかけ、口に入れてあげると嬉しそうに人参を食べる。時々様子を見ながら保育者が他の食品をスプーンに乗せ、口元に運ぶと口を閉じて顔をそむける。Ａが食べたいと思えるように「お魚ここに置いておくね」と皿に置く。隣のテーブルで魚を食べていたＢに、保育者が「お魚おいしいね」と声をかけていると、Ａがその姿を見て魚を手でつかみ口に入れていた。食べてみたらおいしさがわかり、手づかみで自分から食べるようになる。

【保育者のかかわりのポイント】

- 食事は子どもが楽しい雰囲気の中で喜んで食べられるように「食べることが楽しい」「自分で食べたい」という意欲を大切にしながら援助していく。また、いろいろな食品の味や舌触り、食材そのものの味に親しみ、手づかみ食べで自ら食べることなどたくさんの経験を積み重ねていく。
- 一人ひとりの食べるペースを大切にしていく中で、保育者が子どもの指さしや仕草を捉え「いただきます」「これ食べたかったのね」「おいしいね」「ごちそうさま」などの言葉を添え、楽しく食べることを大事にしていく。

４期　「歌が大好き　もう１回」

保育者が子どもの前で「なかなかほい」と手遊びを始めると、子ども達が保育者の真似をして玩具を持ち、床をたたいたり、左右に振ったりする。歌い終わるとＡが人差し指を立てて見せる。保育者が「もう１回？」と聞くと「うんうん」とうなずく。保育者が歌いだすとＡとＢが繰り返し楽しんでいた。“もう１回”と指を立てる様子を見ていたＣは、自分の手をじっと見つめ人差し指を立てようとするが、握ったままである。保育者がＣに「もう１回する？」と言うとにっこり笑った。

【保育者のかかわりのポイント】

- 保育者との信頼関係を深めるために一人ひとりの子どもと触れ合いを多く持ち、子どもの欲求を受け入れていく。また保育者の真似をして表現することの楽しさに共感し、心の安定につなげていく。
- 信頼関係のある保育者が指さしや言葉にならない思いを優しく受け止めることで安心し、満足感が得られる。身近な大人を通して一緒に遊んで楽しいと感じられるように関わることで、周囲への関心が広がるようにする。

１歳３か月～2歳未満

～自分から関わろうとする姿を大切にする～

発達の主な特徴

【行動範囲の拡大】

発達の大きな特徴のひとつは歩行の確立である。歩行の獲得によって自分の体を動かすことができるようになり、探索活動が盛んになる。歩くことが安定してくると、手や指先が使えるようになり、積木を３個以上積めるようになる。様々な物を手に取り、物の出し入れなどを何度も繰り返し集中して遊ぶ。子どもと保育者の間で物のやり取りが広がり、子どもの興味や関心、遊びへの意欲が盛んになる。

【見立てつもりと言葉の習得】

保育者との関わりによって、自ら呼びかけたり片言や一語文を話す。言葉で言い表せないことは指さし、身振りなどで表し、自分の気持ちを伝えようとする。

一語文や指さすものを言葉にして返していくことで、片言を盛んに使うようになり二語文を話し始めるが、個人差は大きい。体を使って遊びながら様々な場面や物へのイメージを膨らませ、遊具などを使い遊びの中からイメージを持って見立てて遊ぶようになる。一人で遊んだり、保育者や友達と遊んだりを繰り返しながら、友達と共感することを学んでいく。担当保育者と信頼関係ができると他の保育者とも関わるようになり、言葉でのコミュニケーションが芽生える。

【周囲の人への興味、関心】

友達や周囲の人への興味関心が高まり、自分の物、友達の物の区別がつくようになる。友達の遊んでいる物が欲しくなったり、保育者と楽しそうにやり取りしている子どもを見ると近づいてきて興味を示すようになる。友達の持っている物を強引に取ろうとして取り合いになり、相手を拒否し「いや」「だめ」と言葉で不満を訴えてくる。保育者が仲立ちとなり、お互いの思いを汲みながら一緒に遊んでいくことで、子ども同士の関わりが育まれていく。

１歳３か月～２歳未満

１期　「はいどうぞ　ありがとう」

壁に果物のポスターがあり、その前にいた A。イチゴの絵に触れて摘まむ真似をして「ぱくっ」と食べることを繰り返していた。少し離れた所にいた保育者と目が合い「おいしいね」と声をかけるとにこっと笑う。すると保育者のところに歩いてきてイチゴを食べさせる真似をしたので「おいしい！」と言うと嬉しそうな表情になった。保育者が「イチゴもう１つちょうだい」というと絵のところに歩いて行き、イチゴを摘まむ真似をして戻ってきた。繰り返し遊んだ後に「S 先生にもイチゴあげようか」と言うと「ゴ」と言って S 保育者のところへ行き、食べさせる真似をする。保育者とのやり取りを楽しみながら遊べるようになった。

【保育者のかかわりのポイント】

安心できる保育者を介しながらそれ以外の保育者にも心を開くようになる時期。安心できる保育者が違う保育者との橋渡しをしながら遊ぶような連携が大切になる。
子どもが興味を示したことに共感し、子どもと目線を共有しながら言葉にならない思いを受け止め、言葉で返すことで言葉と意味がつながっていく。声をかけすぎずゆったりと遊び、子どもの思いに言葉を添え、保育者とやり取りしながら遊びを広げていくようにする。

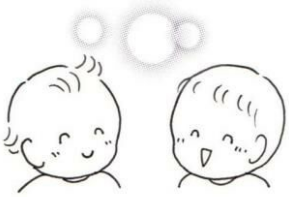
２期　「友達と同じが嬉しいな」

お弁当箱にチェーンリングを入れ、お弁当を作っていた A。それを近くで見ていたＢが手を伸ばし、お弁当を持って行こうとする。Ａは慌てて「あー」と声を出して “持っていかないで” とアピールする。Ｂも「あー」と声を出しお弁当箱をつかんで手を離そうとしない。保育者がそばに行きＢに「ほしかったの？」と声をかけるとうなずく。「じゃあ、同じお弁当を作ろうか」と言うと「うん」とうなずき保育者と一緒にお弁当を作る。お弁当が出来上がると、先にお弁当を持ち積木の電車に乗った A を見てＢも隣に座って体を揺らし、再現遊びが始まった。「楽しいね～」と保育者が声をかけるとにっこりと笑った。

【保育者のかかわりのポイント】

チェーンリングやフェルト、お手玉などをいろいろな物に見立てて遊ぶようになり、遊びが繰り広げられるようになる。そのためいろいろな素材の物を用意する。また、自分の物と友達の物の区別がつくようになるが、時には友達の使っている物が欲しいと主張し、取り合いになったりすることもある。お互いの気持ちを汲みながら一緒に待ったり、気持ちが切り替わるまで見届けたり、その子どもに合った働きかけをしていく。同じ物を介して友達の遊びを見て真似て、遊びが展開できるようにしていくことが大切である。

１歳３か月～２歳未満



３期　「まねっこ！まねっこ！」

ままごとコーナーからクマのぬいぐるみを抱え小走りするＡに気づいたＢが、同じようにクマのぬいぐるみを持ち、後をついて行く。保育者が「どこにおでかけするの？」と声をかけると２人の足が止まった。「お弁当を持って行きましょうか？」と２人に声をかけ、一緒にままごとコーナーに行く。保育者がお弁当にチェーンリングを入れる姿を見て、それぞれお弁当を作り始める。手提げ袋に弁当箱を入れ部屋を歩きまわると、マットの上に座った。２人で顔を見合わせ嬉しそうにお弁当を出して食べる真似を始める。

【保育者のかかわりのポイント】

探索活動が盛んになり、いろいろな事に興味を持ち、試したりする。友達が面白い事を始めると、自分もやってみようとする姿が多くなる。歩くことが楽しく、自由に好きな場所へと移動もできるようになり、行動範囲が広くなる。気持ちのままに行動する姿に対して一人ひとりの要求や情緒面を肯定的に受け止め対応する。

身近な物を他の物に見立てて遊ぶこの時期は、社会性や言語の発達に欠かせない対人関係が深まる。安心できる保育者との関係の中で十分に探索活動ができるようにする。

４期　「じっくり遊ぶ」

棚の後ろ側に文字積木を並べているＡ。絵が見えるように横に並べるとその積木の上にまた文字積木を重ね始めた。保育者はＡの遊びが壊されないよう見守る。２段目が出来上がると嬉しそうに保育者を見たので「上手に並んだね」と声をかけると、嬉しそうにまたやり始めた。その様子を見ていたＢが同じ遊びをしようとそばに来たので「ここでやる？」と誘いかけると「うん」と言って同じように遊び始めた。

【保育者のかかわりのポイント】

この時期は一人で遊べる時間も大切である。子どもがじっくり遊べるようにやりたい遊びを見つけたり、安心して遊べる空間を作るようにする。保育者が集中して遊んでいる子どもの様子を見守り、自分なりのイメージを持って遊んでいる子どものそばで、遊びが広がるような遊具をさり気なく置いたり、タイミングよく子どもの問いかけに応え「いっぱい並んだね」などと共感していく。この時期は自分の思いや、やりたいことがはっきりしてくるので、玩具の取り合いやひっかく、噛むなどの子ども同士のトラブルも多くなる。同じ玩具を複数用意するなどの配慮をすることで、一人ひとりが遊びに集中できるようにしていく。

２歳

～「じぶんで、じぶんで」を主張する２歳児～

発達の主な特徴

【自己主張】

子どもの自我が育ち、生活や遊びの中で自分のことを自分でしようとする意欲が高まり、自分の意思や欲求を言葉で表そうとするようになる。「じぶんで」「いや」と強く自己主張することも多くなり、思い通りにならないと泣いたり、かんしゃくを起こしたりする場面もある。

このようなありのままの子どもの姿を肯定的に受け止め、「わかった」「いいよ」と、気持ちに寄り添い、共感することを積み重ねていく中で、子どもは自分を尊重してもらえたという実感が持て、安心して自己を表せるようになる。一方で、自分の行動の全てが受け入れられる訳ではないことにも徐々に気付いていく。子どもは自分のことを信じ見守ってくれる大人の存在によって、自己主張を繰り返しながらも、何をしたらよいのかを考え時間をかけて自分の感情を鎮め、気持ちを立て直していく。そのことにより、思い通りにならないことや困難なことに対しても乗り越える力が育まれていく。

【基本的な運動機能】

歩いたり、走ったり、跳んだりなどの基本的な運動機能が伸び、自分の体を思うように動かすことができるようになる。様々な姿勢をとりながら体を使った遊びを繰り返し行う。その動きを十分に楽しみながら人や物との関わりを広げ、行動範囲を拡大させていく。

また、紙をちぎったり、破いたり、貼ったり、なぐり描きをするようになるなど遊びが広がり、探索意欲が増し、自分がしたいことに集中するようになる。指先の機能の発達によってできることが増え、食事や衣類の着脱、排泄など、自分の身の回りのことを自分でしようとする意欲が出てくる。

【言葉を使うことの喜び】

２歳の終わり頃には、自分のしたいこと、して欲しいことを言葉で表出するようになってくる。また実際に目の前にはない場面や事物を頭の中でイメージし、身の回りにある物で見立てたり「～のつもり」になって、楽しみながら簡単なごっこ遊びをするようになる。こうした遊びを繰り返しながら、遊びの中で言葉を使うことや言葉を交わすことの喜びを感じていく。イメージが思うがままに行き交うことのおもしろさ、楽しさを味わいながら、身近な大人や子どもとのやり取りが増えていく。

２歳

１期　「友達の使っているのが魅力的」

園庭で遊んでいたＡが、泥水をすくってペットボトルに入れていた。保育者が“じょうご”を渡すとＡも興味を示して使い始める。それに気付いたＢがやってきて、じょうごを使いたいと要求した。保育者が黄色いじょうごを渡したところ、ＡはＢが手にした黄色いじょうごが欲しいと大泣きする。「Ｂちゃんのがほしかったのね」と保育者はＡの気持ちを受け止めるが、Ａは泣いて主張し続けている。その後Ｂと保育者がそばで楽しそうに水の移し替えをしていると間もなく泣き止み、その様子に目を向け始めた。

【保育者のかかわりのポイント】

同じ玩具が手に入れば満足、というわけではなく、“Ｂちゃんが使っているあのオモチャが欲しい”といったＡのこだわりはこの時期らしい姿であり、その気持ちをまずは受け止めていく。生活や遊びの場面での「こうしたい」「こうでなくてはいやだ」というこだわりを大切な育ちと捉え、じっくりと付き合う姿勢が求められる。また、いったん気持ちを受け止めた後、子どもの高ぶった気持ちが落ち着くまでの「間」をとることで、子ども自身で別なことに気持ちが向いたり、そのことを受け入れるなど立ち直るきっかけがつかめるようになっていく。

２期　「欲しかったんだと、しっかりと主張」

Ａがレールをつなげ汽車で遊んでいた。そこへＢがきて「赤いのがいいの」と汽車を欲しがった。保育者は「Ｂちゃんも使いたかったのね。今、Ａちゃんが使っているから後で貸してもらえるか聞いてみようか」と言い、Ａに２人で声をかけてみたが「だめ、使ってる！」と断られた。Ｂは「いやなの、欲しいー！」と泣き出した。保育者に「ＢちゃんもＡちゃんと同じのが欲しかったのね。」と声をかけられると、Ｂは大きな声をあげて泣き続ける。保育者がＢの涙を拭いていると、しばらくしてＡが「おわった」と汽車を差し出した。「Ｂちゃんよかったね。Ａちゃんありがとう」と２人に声をかけると、Ｂも小さい声で「（ありが）と」と笑顔で受け取り遊び始めた。

【保育者のかかわりのポイント】

保育者や友達の働きかけに対して「いや」「だめ」と意思表示することが多くなり、Ｂもどうにかして自分の要求を通そうと激しく自己主張する。保育者は「これがいい・これじゃないといやだ」という子どもの気持ちを受け止め、言葉にして共感する。泣いたり怒ったり、思い通りにしたいと様々な方法で表現する姿に対して、保育者がしっかりと気持ちを受け止めることで、たとえ要求が全て通らなくても理解してくれる存在があることで納得し、次へと向かえるようにしていく。

２歳

３期　「気持ちを切り替えて」

部屋で何人かが赤ちゃんに見立てた人形にミルクを飲ませたり、ご飯を食べさせたりして世話遊びをしていた。そこへＡが来て、Ｂが使っていたミルクを指し「Ａもミルクが欲しい。貸して」と言うが断られた。その後Ｂはミルクを棚の上に置き、人形を連れてその場を離れた。Ｂがいなくなった後、ミルクに気付いたＡはその場から持ち去った。戻ってきたＢは「Ｂちゃんの」と主張し取り返す。Ａは「使ってなかった」と言い返すが、聞き入れてもらえない。保育者はＡの使いたかった気持ちを受け止めながら「Ｂちゃんが使ってたみたいだよ」と声をかけ見守る。しばらくして Ｃ が「ジュース屋さんです。ぶどうジュースはいかがですか」と保育者に声をかけてきたので「おいしそうね、いただきます」とやり取りが始まった。するとしょげていたＡが笑顔でやってきて「ジュース屋さんです。れもんジュースはいかがですか」と遊びに加わった。

【保育者のかかわりのポイント】

Ａは、始めはミルクを使いたかったが使えず、そのことにこだわっているように見えたが、別の遊びに興味や関心が向くと気持ちを切り替える。友達の存在や何気ないひと言によって、遊びが広がったり、こだわりが切り替えられるきっかけになることもある。保育者は子ども同士のやり取りを見守ると共に、言葉や表情からその時の感情を汲み取りながら思いを聞いたり、必要に応じて代弁をしていく。また、友達と楽しく遊ぶ経験を積み重ね、思い通りにならない場合でも気持ちの切り替えができるような仲立ちをしていく。

４期　「同じイメージで楽しいね」

Ａが保育者に「お風呂やろう」と誘いに来た。「お風呂はどこにするのかな」と声をかけると牛乳パック積木を持ってきて並べ始めた。それを見ていたＢが「なにしてんの？いれて」と寄ってきた。「お風呂だよ、いいよ」と一緒に作り始め身体を洗っていると「シャワーしてね。きれいにするんだよ」とＡが玩具を頭に当ててギュッと目を閉じた。保育者が「目に石鹸が入ると痛いものね。」というと「うん、だって痛いんだよ。Ａ泣かないんだよ」と得意気に話す。Ｂも「Ｂちゃんもシャワーする。泣かないよ、みてみて」と頭に玩具を当てた。保育者が「すごいね。頭からかけても泣かないんだね。お姉さんだね」と声をかけると嬉しそうに顔を見合わせていた。

【保育者のかかわりのポイント】

ＡとＢは日々の経験の中から「お風呂」というイメージを持ち、保育者を仲立ちとしながら遊びがつながった。この時期は保育者や友達のすることに興味を示し真似するようになる。「～のつもり」になっての見立てや世話遊びから、短時間ではあるが保育者や友達とままごとなどの簡単なごっこ遊びを楽しむ姿が増えてくる。保育者は子どもの発想やイメージが膨らむようにその思いに寄り添い、共感し、遊びが展開するように援助していくことが大切である。その積み重ねの中で、安心できる大人や友達と一緒に過ごすのが楽しいと思える経験をたくさん感じられるようにしていく。

３歳

～何でもやりたい意欲いっぱいの３歳児～

発達の主な特徴

【基本的生活習慣】

食事・排泄・衣類の着脱など、基本的な生活習慣がある程度自立してくる。例えば、不完全ながらも箸を使って食べようとしたり、排泄や衣類の着脱などを自分からしようとする。

基本的な生活習慣がある程度自立することにより、子どもの心の中には「何でも自分でできる」という意識が育ち、手助けを拒むことが多くなる。自分の意思で生活を繰り広げようとすることは子どもの主体性を育み、意図を持って行動することや、自分の生活を律していくことにつながる。

【運動機能の発達】

基本的な運動能力が育つ。歩く、跳ぶ、押す、引っ張る、投げる、転がる、ぶらさがる、またぐなどの様々な動作や運動を十分に経験することにより、自分の体の動きをコントロールしたり、体を動かすことが好きになり、いろいろなことに取り組むようになる。

【言葉の発達】

挨拶や返事など生活に必要な言葉を使うようになり、日常生活での言葉のやり取りができるようになる。自分の思ったことや感じたことを言葉に表し、保育者や友達と言葉のやり取りを楽しむようになる。知的好奇心もより強くなり「なぜ」「どうして」といった質問が多くなる時期である。やり取りを通して、言葉による表現がますます豊かになっていく。

【友達とのかかわりと社会性】

自分のことを「わたし」「ぼく」と言うようになるなど自我が成長するにつれて、認識面で家族、友達、保育者などの関係が分かり始める。周囲への関心や注意力、観察力が伸びてきて、見たり聞いたり、人と関わる力が育っていく。遊びの場面では、場所を共有し一人ひとりが独立して遊んでいるように見えながら、友達の遊びを模倣したり、玩具を仲立ちとして子ども同士で関わったりする姿が見られる。時には、玩具の取り合いから喧嘩になることもあるが、徐々に友達と分け合ったり順番に使ったりするなど決まりを守ることを覚え始める。このような経験を積み重ねながら友達との関係が深まっていくと、子どもは様々な玩具を使って夢中で遊んだりイメージを広げながらごっこ遊びを楽しみ、その中で身の回りの大人の行動や日常の経験を取り入れて再現するようになる。物事の続きを期待しながら、友達とイメージを共有し、一緒に遊ぶ楽しさや心地良さを経験することにより社会性を育んでいく。

３歳

１期　「２人とも　おとうさん」

砂場でのお団子作りをきっかけにお家ごっこが始まった。ＡとＢが急に「ぼくが！」「ちがう！Ｂが！」と言い合いになる。保育者が「どうしたの？」と聞くとＡが「ぼく、おとうさんがいい」Ｂも「Ｂがおとうさん」と言う。保育者が「２人おとうさんでもいいんじゃない」と声をかけると２人の表情が明るくなり「お仕事にいってくる」と言いながら、それぞれがその場を離れて行った。数分後Ｂが「ただいま～」と戻り、保育者に「早く帰って来たでしょ。Ｂが先生を守ってあげるからね」と頬を寄せてきた。Ａも「ただいま、お土産に本買ってきたよ」とお土産を渡す真似をした。その後も２人は、「会社にいってきます」「ただいま」とやり取りを繰り返したり、ほかの子どもの遊びに加わったりしながら、またお父さんになって戻り、しばらくお家ごっこが続く。

【保育士のかかわりのポイント】

ＡとＢは２人とも「お父さん」になったつもりでそれぞれのイメージで遊んでいる。３歳前後は身近な大人の行動や日常の経験を取り入れて再現して遊ぶようになる。また、場を共有しながらそれぞれが独立して遊ぶ『平行あそび』が中心であるが、平行して遊びながらも他の子どもの遊びを模倣したり、保育者の仲立ちで友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになってくる。友達との関わりも増えてくるので、保育者は仲立ちとなり互いの気持ちを汲むことを大切にし、言葉を交わしたりやり取りをしながら一緒に遊ぶことの楽しさを知らせていく。

２期　「意欲いっぱい」

プール遊びで水面に顔つけができるようになったＡが、水に顔を近づけるのが不安そうな数人の友達の前で「Ｂちゃん、見てて」と勢いよく顔をつける。それを見ていた子どもが「わたしも」と言って一瞬だが顔をつけた。保育者が「すごいね。できたね」と声をかけると嬉しそうな表情になった。しばらくすると今度は、他の子どもも「えいっ！ってすればできるから見ててよ」と水面に鼻先だけをつけて「ほらね」とやって見せた。その姿をじっと見ていたＢがゆっくりとプールの中にしゃがみ、唇位まで水につけることができた。保育者と目が合うと笑顔になった。

【保育士のかかわりのポイント】

何でもやりたいという思いが育つ３歳児。子ども達は、友達がやって見せたり、声をかけてくれたりしたことがきっかけとなり、自分もやってみようと行動に移す。そこでできたことが自信となり、次の行動への意欲につながっていく。保育者は、子ども達が周囲への興味や関心が広がり、互いに刺激し合いながら成長する姿を大切にしていく。一人ひとりの状況をよく観察し「やってみよう」とする子どもの意欲を受け止め、ほめたり認めたり励ましていく。その中でほかの子どもの状況や思いにも気付けるように丁寧に援助していく。

３歳

３期　「わかってはいるけども・・・」

ホールでタッチ鬼をする。初めはルールを伝えながら保育者が鬼になり「タッチ」してつかまえたら鬼ゾーンへ連れて行った。子ども達はつかまらないようにと、必死で逃げるが次々と鬼ゾーンへ連れていく。繰り返し遊んでいると、Ａ が「鬼になりたい」と言い出す。Ａが鬼になると友達は「鬼さんがんばって捕まえて」と応援しながら逃げていく。Ａ は狙いを決めて次々とタッチをする。Ｂはつかまると「Ａ ちゃんがバシッてやった！」と怒り出した。Ｂに話を聞くと「だってタッチがいやだったんだもん」とうつむき加減に下を向いて言った。保育者は、Ｂに「そうか。じゃあＢちゃんが鬼になった時にがんばって誰かをタッチしちゃおう」と励ますとニコッと笑って走り出した。

【保育士のかかわりのポイント】

簡単なルールのある遊びでは、保育者や友達と一緒に遊びたいという思いがあると同時に、つかまることに対して抵抗がある時期でもある。Ｂはつかまった悔しさをたたかれた（タッチされた）ことに置き換えて表現し、葛藤する。保育者は一人ひとりの思いや表し方を丁寧に受け止め、共感し、子どもが次へと向かう意欲が持てるよう援助していく。また、遊びを繰り返し経験する中でルールを知り、保育者や友達と一緒に楽しみ、自己を伸び伸び発揮できる力を育んでいく。

４期　「ごっこ遊びに広がって」

お気に入りの人形で世話遊びをしているＡに「一緒に行こう」と誘うＢ。２人で箱をバギーに見立て人形を乗せ紐で引っ張りながら室内を歩きまわる。時々、人形に母親のように話しかけたり覗き込んだりしている。「もうすぐ着くよー」と、バギーから降ろし抱き上げて買い物を楽しむ。ままごとコーナーでは、レストランの準備をしている３～４人の子ども達が２人を「いらっしゃいませ」「何かたべますか」と迎え入れる。メニューを手にすると「おいしそうだね」「これにしようか。でも、ミルクあるかな～」とつぶやく。するとレストランの子どもが「ミルクもあるよ」「みんなおいしいからね」と、店員になりきっていた。

【保育士のかかわりのポイント】

子ども達は、自分の経験を遊びの中に取り入れイメージを広げ、言葉や動きで表し遊ぶようになる。気の合った友達同士での世話遊びに興味や関心を示した友達が加わり、イメージを共有してごっこ遊びへと展開する。保育者は、子どものイメージを大事にし、必要に応じて声をかけたり、一緒に楽しんだりしながら遊びが広がるよう援助し、見守っていく。また、玩具、遊具などを用意し環境を整えていく。

４歳

～生き生き、個性豊かな４歳児

発達の主な特徴

【全身のバランス】

運動能力が発達し、「～しながら～する」というような行動ができるようになり、５歳児と一緒にルールを守り楽しめるようになる。体のバランスを上手くとり、楽しむようになる。手先が器用になり道具を使って制作しようとする。

【基本的な生活習慣に向けて】

自分のできることは自分ですすんでしようとする。また、保育者がやっている事を手伝い、やりたい気持ちが高まってくる。 健康に関心を持ち様々な食べ物を食べようとする。

【身近な環境への関わり】

水、砂、土、草花、樹木といった身近な自然物を使って遊ぶ。虫や動植物に興味を示し、積極的に見たり触れたりして関わりを持とうとする。自分の手足を使い、五感を働かせて見たり触れたりすることを何度も繰り返し経験することで、関わり方や遊び方を体得していく。

【認識・言葉】

未来、過去の時間感覚を表わす言葉を使う。友達の前で自分の考えたことや経験したことを話そうとする。

【想像力の広がり】

仲間と言葉や遊びのイメージが共有でき、構造遊びやごっこ遊びなど一緒に遊ぶようになる。友達とイメージを膨らませひとつの物語の役割を演じることを喜ぶ。想像力も豊かになり、様々な素材や用具を使って、自分なりに工夫して表現することを楽しむ。

【葛藤の経験】

友達と鬼ごっこや中当てなどの簡単なルールのある遊びが出来るようになる反面、自分なりの解釈をしたり、ルールを守ることが出来ずに葛藤することがある。周りからの評価を意識し始め、友達からの注意を嫌がり、わかっていても「みないで」「こないで」などの表現をする姿があるが、保育者が思いを汲みながら対応していくことで少しずつ折り合いをつけられるようになる。年下の子との関わりで優しく接しようとするが、十分に気持ちに添えないところがある。自己の気持ちをコントロールしようとするようになり、少し我慢出来る姿が出てくる。

【自己主張と他者の受容】

相手の気持ちに気付けるようになり、共感出来ることがふえてくる。同じイメージで友達と一緒に遊び、仲間に入りたいという思いを相手に伝えて集団が少しずつ大きくなってくる。５歳児や友達のやっていることに刺激を受けたり憧れがあり、真似をし始める。出来ないところは大人に自分の思いを言葉で伝え、手助けしてもらいながら実現しようとする。覚えたことや知っていることを口にし、誰かに伝えたいと思う姿や「なんで～になるのか」など疑問や不思議に思った事を質問するなど、人と関わる楽しさを感じる。自分の経験したことや自分の思いを言葉で親や保育者に話したり友達に伝えようとする。

４歳

１期　　「春を探しに」

春をイメージする絵本の読み聞かせをしてから散歩に出かけた。絵本の内容と同じように「春」探しをする子ども達。Ａ「あっ、だんごむしだ」早速だんご虫を見つけ手のひらに乗せる。Ｂは壁の穴の排水溝を覗いて枝を差込みながら「もう春ですよ、誰かいませんか」としゃがみこんで枝をツンツンと動かしている。「先生こんなもの付いてきた」と差し込んだ枝の先に白い綿のような“くもの巣”が付いてきてとても嬉しそうである。てんとう虫を見つけたＣは指差ししながら「本と一緒だね」と言い、じっと見ている。

【保育者のかかわりのポイント】

子ども達が身近な自然に興味や関心を持ち、親しみながら遊びの中に取り入れていけるようにする。日頃から動植物や土、砂、水や光などの自然を感じ、触れる機会を多く持つことを意識して保育を行っていく。図鑑を使って調べたり、園内でも実際に生き物を飼育し世話をすることで、実体験の中から観察力や他者を理解できる心が育まれていく。

絵本の読み聞かせをすることで子ども達の行動には変化が見られ、興味や関心を持つきっかけとなった。身近な自然に触れることは考える力を培い、好奇心や探究心が掻き立てられる。見た事や体験した事を保育者と共感しながら、表現することの楽しさを味わえるようにする。

２期　　「どうやったらいいかな？」

年長児の遊ぶ様子を見てＡが「ビー玉を転がす道を作ろう」と提案し、Ｂ・Ｃ が「やるやる」とレールをつなぎ始めるが、床に平面的に並べるためビー玉は転がってはいかない。Ａ「そうか、高くすればいいんだ」と気付く。Ｂ・Ｃにも伝えるが、３人がそれぞれに作っていくためレールはつながらず、ビー玉は途中で落下して「あ～あ」と落胆していた。Ａ「ここから落ちたんだから、レールを近づけよう」と修正し始めた。しかしなかなかうまく転がらず試行錯誤していた。Ｂ「そうだ横から落ちないように壁を作ろう」と言い、道に沿ってレンガブロックで壁作りを始め、少しずつ試しながらビー玉を転がしていった。道は完成し、スタート地点からゴールまでビー玉は転がりきった。「やったぜ！」と大喜びの３人だった。

【保育者のかかわりのポイント】

どうやったらビー玉がうまく転がるのかを一生懸命考えながらそれぞれが思いを出し合い、徐々にまとまっていく展開を見守っていく。魅力的な遊びにはその仲間に入りたいという気持ちが生まれ、その思いを相手に伝えながら集団が少しずつ大きくなっていき、遊びが発展していく。みんなで一緒に遊ぶことが楽しい、おもしろいという経験を積み重ねる。伝え合うことや共感し合うことで、子どもが力を合わせて遊びを展開出来るように見守ったり、援助していく。

４歳

３期　　「ぼくが転がしたかったけど…」

転がしドッジボールをする。何度かやっているのでルールはわかっているが、外野はボールが来ると「自分が！」という思いでボールを追いかける。転がって来たボールをＡとＢが取り合い、自分が先に取ったと主張して譲らない。Ｃ「けんかしているとみんな逃げちゃうよ」と言い、Ｄ「そうだよ！Ａのせいでつまんなくなっちゃう」と言う。それでもＡとＢは互いにボールから手を離そうとしない。Ｃ「じゃあ、ジャンケンしなよ！」と言うとそれを聞き入れ、２人はジャンケンをし、Ａが勝ってボールを転がすことになった。その姿をじっと見つめ、ボールの行方を目で追うＢ。転がっていったボールを次に手にしたのはＤ。その時Ｂは怒った表情をしながらも、Ｄのボールを奪わずに我慢していた。

【保育者のかかわりのポイント】

友達と一緒に簡単なルールのある遊びができるようになるが、まだまだ“自分が”と自己主張する年齢である。その主張で互いにぶつかり合う姿が見られ、友達との関わりの中では様々な葛藤も生まれてくる。また、４歳児は客観的に自分を見ることができるようになる。相手の行動の良し悪しを指摘したり、友達から見られているという意識も芽生え「～だけど～する」と自分の気持ちに折り合いをつけようとし、気持ちをコントロールする力となっていく。子どもが友達の思いに気付いたり、互いに主張し合いやり取りする場面を大事にし、見逃さずに思いを受け止め、自信につなげていくようにする。

４期　　「お店屋さんごっこ」

お店屋さんごっこで 4，5 歳が決めた店の名前を聞き、作業を一緒に行う。看板作りではデザインを５歳児が行い、３歳児クラスの子ども達が色を塗ったり折り紙の飾りをつけるなど、出来ることを行う。折り方がわからない時は５歳児が手をとって優しく教えてくれるので、その後も頼りにする姿が見られる。お店屋さん当日は異年齢のペアで回り、一緒に行動することで関係も深まっていった。売り手になった時には３歳児がスタンプ係になり、お客さんのカードにスタンプを押す。5 歳児に「上手に押せたね」と言われると誇らしげな表情である。また、4，5 歳児と一緒に「いらっしゃいませ」と言って呼び込んだり、お客さんへの対応の仕方を見て真似ながら自分の役割を果たしていた。

【保育者のかかわりのポイント】

日々の活動の中で、４．５歳児クラスとの関わりも多くなり、大きいクラスの子どもがやっていることを真似してみたり、憧れの気持ちが育ってくる。また、遊びに対してイメージの共有もできるようになるので、子ども達が役割を持ってごっこ遊びを楽しめるように保育者も一緒に関わりながらすすめていく。お店屋さんごっこを通して３歳児なりのイメージを持って楽しめるように手助けしていく。子ども同士の遊びがお互いに見えるようにし、大きいクラスの子ども達と一緒にやった、教えてもらったという経験ができるように援助していく。

５歳

～育ちあい、たのもしい５歳児～

発達の主な特徴

【基本的生活習慣の確立】

基本的な生活習慣が身に付き、保育者に指示されなくても一日の生活の流れを見通しながら行動することができるようになる。自分の役割が分かり、人の役に立つことが嬉しく、すすんで保育者の手伝いをし、当番活動に責任を持つ。健康に興味を持ち、病気の予防と清潔との関連に理解を示し、生活に必要なマナーが守れるようになる。

【全身運動】

長い距離を歩けるようになり、相手の歩調に合わせることができる。運動能力が育ち、走り縄跳びやボールをコントロールして投げられるなど、身体の機能を協応させた複雑な運動が出来る。また、手先も器用になり結ぶ、絞るといった動作も出来るようになる。

【目的のある集団行動】

見通しをもった行動が出来る。目的を持ち、様々な行事の取り組みに対して、友達と協力し話し合いながら活動が出来る。一定の時間椅子に座って保育者の話しを聞くことが出来る。クラスの活動の中で目的を持って自ら努力したり、頑張っている友達を励ます姿が見られ、他者を認める気持ちが育つ。喧嘩の仲裁やクラス内に問題が起きた時すぐに保育者に頼らず、自分達で解決しようとする姿が見られる。集団としての機能が高まり、友達と話し合いながら自分達で遊びを進め、自分の思いや考えを言葉で伝えてイメージを共有する。友達と協力し、ルールを守って遊べるようになる。

【思考力の芽生え】

遊びの中で、曜日や時間を理解し始め、今は何をする時間かを意識して行動するようになる。また、数を数えたり文字に興味を持つようになる。納得出来ない事に対して反発したり自分の意見を主張しながらも、自分なりに物事の良し悪しを判断したり、相手の間違った行動を正す力が芽生え調整する力が育ってくる。自分で考えながら、自分の気持ちをわかりやすく表現したり、相手の気持ちを聞こうとする力が育つことで相手を認められるようになってくる。イメージが広がり、いろいろな素材を組み合わせて描いたり作ったりして工夫することを楽しむ。

【仲間の中の一人としての自覚】

行事など自分の目標、クラスの目標に向かって取り組むことができる。友達と一緒に遊ぶ中で、勝ち負けのゲームなどをした時「〇〇が〇〇だから負けた」と相手に言い、思い通りにならないことを経験する。仲間の中で様々な葛藤を体験し、違う意見があることに気付き、認めたり、受け入れたりすることができるようになる。周りの状況が良くわかるようになり、困っている人がいるとそのことに気付き助けようとする。また、生活や活動に責任や見通しが持てるようになり、出来ないことに対して自ら努力し、仲間を応援する気持ちが育つ。

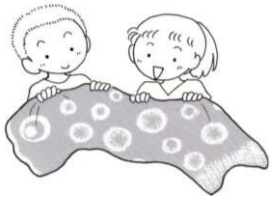
５歳

事例１　　「もうすぐ年長」

人数報告を年長組の子ども達と一緒にやりながら当番の引き継ぎを行っていく。４歳児は興味津々の表情で５歳児について行く。調理室で自分達が伝える番になると緊張した面持ちで調理室のドアを開けるが、なかなか声が出ない。後ろから５歳児が小声で耳打ちしてくれた言葉をなんとか同じように伝えた。不安な気持ちを互いに手を握り合うことで紛らわせていたが「はい、わかりました。どうもありがとう」と職員から言われてほっとした表情を見せ、部屋に戻って来た。担任から「おかえり」と声をかけられると「ドキドキしたね」と顔を見合わせていた。

【保育者のかかわりのポイント】

４歳児は卒園式の練習に参加したり当番活動の引き継ぎが始まることで、子ども達の意識に少しずつ変化が見られてくる。次は自分達が年長組になるという意欲を引き出していくためにも、より身近で具体的な活動を経験させていくようにする。人数報告は緊張感を伴いながらも年長クラス進級への期待感を膨らませ、意欲的に取り組める活動である。子ども達は、担任以外の職員との関わりや、自分の言葉で説明したことが伝わる喜びを感じられる。４、５歳児クラスの職員の連携を密にして活動を進め、年長クラスへの憧れや期待を高めていく。



事例２　　「グループで絞り染めをやろう」

絞り染めでこいのぼり作りをするために何を使いたいか子ども達と話し合い、石ころやペットボトルのふた、大きさの違うビー玉を子ども達と一緒に用意した。保育者がグループごとに子ども達の目の前でしばり方を見せていく。輪ゴムは１回ごとにねじり引っ張りながら強めにかけていくことを何度か行い、知らせる。保育者が「できるかな？」と声をかけると、子ども達は「うん、できる」「わかった。だいじょうぶ」と言う子と、少し首を傾げる子がいる。実際にやってみると、ちから加減も丁度良くゴムかけが出来ている子がいる一方で、Ａはゴムのかけ方に戸惑いうまくいかない。保育者と一緒だと出来るのだが、自分でやろうとするとゴムがゆるくなってしまう。保育者とＡとのやりとりに気付いていたのであろう、ＢがＡに「もっとゴムを引っ張るんだよ」と言い、ＢはＡのゴムかけを一緒に手伝い仕上げようとする。

【保育者のかかわりのポイント】

５歳児は手先が発達し、いろいろなことに興味と関心を持って取り組み、少し難しいことにも挑戦できるため、絞り染めを保育に取り入れた。活動に必要なものを自分達で話し合い、具体的にイメージさせることで意欲も増す。共通のイメージを持ってグループで活動する中で、自分と友達との意見の違いを話し合い、自分のことだけではなく友達のことにも気付けるようにしていく。助け合える仲間関係につながる今の姿を大切にし、子ども同士のやり取りを見守り「自分達でできた」という充実感と自信が持てるようにする。また、一人ひとりの良さを引き出していくことで、仲間関係の深まりを援助していく。

５歳

事例３　「米作りを通して」

春に田んぼを作って稲を植え、毎日水やりと草取りの当番をして世話をしている。夏には、「これをちゃんと取らないとお日様の光が土の中まで届かなくてお米に栄養がいかなくなるんだよ」と言いながら水に浮く藻を取っていた。稲の横に立ち、背比べをして稲が生長する様子を観察し、穂が付き始めるとスズメから守るためにみんなで案山子を作った。収穫の日、「固くて切れないよ～」「農家の人はこれをいつもやっているんだからがんばらなくっちゃね」と、友達同士で言い合いながら稲を刈り天日に干している。その米を脱穀し、毎日少しずつすりこぎで“もみ”をすり、時間をかけて玄米にする。精米の日、玄米から白米になる様子を見て「うわ～まっしろい」「ここまで頑張ったからふわふわのおこめができるよ」と感動していた。待ちに待ったおにぎりパーティーでは、一人ひとりが炊けたご飯をラップに乗せてもらい、両手で大事そうに握りながらなかなか食べようとしない。やっと口に入れると「おいしい、こんなにおいしいおにぎりは初めて」「よく噛むと甘くなる」と歓声をあげていた。

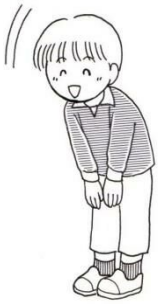
【保育者のかかわりのポイント】

４歳児クラスの時に年長クラスの子どもの姿を見ながら稲を育てる手伝いをした経験を生かし、５歳児クラスになると自分達で稲作りを進めていくようになる。その中で、世話を楽しみながらも当番としての役割も担っていく。

収穫までには時間や手間がかかるが、保育者が手伝いながら子ども達の発見、気付き、感動から知的好奇心を高め、根気や喜びなど様々な経験を大事に進めていく。自分達の体験を通して作ってくれる人への感謝、食べ物を大切にする気持ちを育てる。また、自分達が育て収穫したものを使って調理体験をする中で、用務職員や栄養士、調理職員など様々な職種の人の協力があることを伝えていく。みんなで作ったり食べたりしながら食への関心を高めていく。

６歳

～移行期～



発達の主な特徴

【子どもの姿】

全身運動がなめらかで巧みになり、快活に跳び回れるようになる。これまでの経験から、活動や予測の見通しを持つ力や意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。身近な保育者に甘え、気持ちを受けとめてもらいながら、様々な経験を通して自分の力で取り組もうとする力が一層高まる。

【巧みな全身運動】

６歳を過ぎると身体的発達に加え、年長としての自覚や誇りを持った姿が見られるようになる。全身の動きがなめらかになり、様々な運動に意欲的に挑戦するようになる。手先の動きも一段と細やかになり、材料や用具を用いて工夫し製作するなど、様々な方法で表現をするようになる。

【自主性と協調性の態度】

仲間の中での約束が大事になり、守ろうとしたり、集団遊びが活発になり、遊びの中で役割が明確になる。子ども達は役割を担い協同しながら遊びを持続し、様々な役割を考え、試行錯誤しながら満足いくまで楽しむ。

仲間の一員として認められ、遊びの楽しさを共有するために友達の主張に耳を傾け、共感できるようになる。意見を言い合うことで互いの主張を認め合い、仲間と意見を調整することが出来るようになり、人との関わりの中で自信と協同の姿勢や態度が身につく。

【思考力と自立心の高まり】

これまでの活動や経験を通して達成感や自分への自信を持つようになり、様々な事に関心を示し、意欲的に関わるようになる。自分の考えを言葉で伝える、文字を書く、読むなど思考力が高まり、社会事象や自然事象などに対する認識も広がる。

様々な経験を通し、対人関係が深まり、自立心を高め就学への期待を持つ。

～活動の見通しをもつ、持ち物の管理をする～　（生活）

【目ざす子どもの姿】

☆一日の生活を見通し、状況に応じて行動したり、自分達で生活を進めたりする。
☆話を聞く時の態度が分かり、状況に応じた行動ができる。
☆身の回りのことは自分でする。（衣服の着脱、調節、服をたたむ、片付け、排泄の始末）
☆遊ぶ場や活動に応じて持ち物の準備や整理が出来る。
☆挨拶をしたり、感謝の気持ちを伝えることが出来る。

【経験させたい内容】

事例１　「一日の流れを見通して行動する」

保育者が散歩に行くことを伝えると子ども達は、自分から遊んでいた玩具を片付けたり、トイレに行って準備していると気付いたり、友達にも片付けやトイレに行くことを伝える。散歩から帰り、着替え、トイレなどを済ませ、給食の時間になると「あっ、私、給食当番だった。早く準備しよう」と自分が当番だったことを思い出し、急いで机を拭いたり、配膳の準備を始める。いつも同じ時間で生活を進めていることで、自分で考え見通しをもった行動が出来る。

事例２　「自分の物は、自分で管理をする」

自分の物の整理、整とんが出来るようになってきている。着脱時に服の枚数を自分で確認し、足りないものを保護者に伝えられる。衣類カゴやロッカー、引き出しなどの乱雑に気付き整理している。共同制作やごっこ遊びの時、クラスで使うもの、園全体で使うものの区別が出来る。十分に遊んだ後に友達と分担したり、一緒に片付けや整理整とんを最後まで責任を持って取り組んでいる。

【保育者の関わりのポイント】

【生活の流れを予測して行動出来るようにする】
・一日の活動の見通しを持って生活出来るように伝える。活動の前、活動の間にトイレや手洗いなど自発的に済ませるようにする。
・活動の区切りを意識させ、自ら活動を終えて片付け等が出来るように意識付けをしていく。
・日々の生活の中で挨拶を交わす心地よさを伝えていく。

【見通しを持って自ら行動できる力を育てる】
・朝の会を開き、前日までに予定の確認をしたり、一日の生活の見通しを持ち自ら進んで行動出来るようにする。
・クラス全体、個人、グループでの活動など、意図的に活動時間を構成し、気持ちを切り替えてそれぞれの活動に集中できる習慣を身に付けられるようにする。

【持ち物の自己管理】
・保育者が持ち物やロッカーの整理を自分で出来ているか確認を行い、出来ていない子には整理の仕方を伝え、徐々に自分で考えて整えられるようにする。一斉活動と個別指導で効果的に進める。
・傘の使い方を知らせ、登降園時に傘立てに入れる、出すなど自分で始末出来るように伝えていく。
・はさみ、クレヨン等子ども自身で管理する物を増やし、決められた場所に片づけられるようにする。

～　伝える、協力する、指示を聞く　～　（人との関わり）

【目ざす子どもの姿】

☆自分で“してよいこと”“してはいけないこと”の判断ができるようになり、仲間との遊びのルールや社会の決まりの大切さなどを理解し、行動する。

☆挨拶や感謝の気持ちを言葉で伝え、困っている人には言葉をかけたり、手助けをしようとする。

☆話を聞く時の態度がわかり、相手の話を最後まで聞く。

☆危険なことがわかり、気をつけて行動する。

☆友達と目的を持って話し合い、協力して取り組む。

【経験させたい内容】

事例１　「話し合いを通してルールを守る大切さに気づく」

園庭で「ドッジボールしようよ」とクラス全員に呼びかけ遊び始めた。チーム決めは子ども達の意見で決め、当てる子と逃げる子をジャンケンやリーダーの子が決めて遊んでいると、「〇〇ちゃん、線から足が出てるよ」とゲームが中断し「ほら、遊ぶ時間がなくなっちゃったじゃないか」「せっかくみんなで楽しく遊んでたのに」と全員が不満の声をあげた。そこで話し合いの時間を設け、ドッジボールのルールを確認し、みんなで楽しくゲームが終わるまで遊ぶにはどうすれば良いか意見を出し合った。話し合うことで子ども達は「ルールは守らなくちゃだめだよね」「守らないと楽しく遊べないよね」と、改めてルールを守ることの大切さが理解出来た。

事例２　「おみせやさんごっこの係決め」

今年は何のお店にするか話し合う。昨年度の経験を思い出しながら、お店が決まり、レジ係、お金・チケット・看板作り、呼び込み係等いろいろな役割が出された。係はレジ係に人気が集中したが、子ども同士の話し合いから「じゃあ、交代してやればいいよ」「お金もらう人とおつり渡す人に分かれればいいんじゃない？」とお互いに意見を出し合い、譲り合いながら役割分担をする。「この箱レジに使おうよ」「あ、うちにも箱あるよ。チケット入れる箱持ってくるね」と子ども同士協力し、楽しみながら準備を進めている。

【保育者の関わりのポイント】

【自分の思いを伝える機会を持つようにする】

・自分の思いや考えを、グループやクラスの中で友達にわかるように話せるようにし、感じた事や発見した事を自分なりに伝えようとする。

・友達の話を聞き、自分と違う意見がある事に気付く。また友達から言われて嬉しい言葉や嫌な言葉を考え、話し合う場を作る。

【協力してやり遂げる喜びを持てるようにする】

・グループ制作や行事の活動、劇遊びや合奏など友達と協力して取り組む機会を作る。

・共通の目的の達成に向け、友達と考えを出し合い失敗を繰り返しながら、やり遂げた喜びや満足感を経験出来るようにする。そのために活動内容、時期、グループ構成などを計画的に構築していく。

・個々のよさや得意な事をクラスの中で認め合える機会を作り、互いに刺激し合い育ちあえる集団にしていく。

～　話を聞く・知識、認識、思考力・創意工夫　～（学びの芽生え）

【目ざす子どもの姿】

☆身近な事物、事象・文字や数量などに関心を持ち、遊びや生活に取り入れる。
☆自分の興味・関心のある物に触れる・見る・聞く・作るなど、試行錯誤しながら取り組む。
☆自分なりの目標を持ち、それに向かって試したり挑戦したりする。
☆自分のしたい事が実現できた嬉しさや楽しさを感じ、満足感や達成感を得る。

【経験させたい内容】

事例１　「芋掘り遠足を通して芋について知ったり、表現する」

芋掘りを前に、芋にはどんな種類があるか、どのように育つのか、絵本や図鑑で調べ、どんな調理方法があるのか栄養士・調理職員に聞いたりする。芋掘りでは両手で土を掘り、「黒い土だね」「砂場の砂とは違うね」と土の感触の違いに気付いた。掘り起こした芋を手にし、「こんなに大きいお芋が掘れたよ」「僕のは長いよ」と収穫の喜びを表現していた。描画ではよく観察し「葉っぱは丸い形をしてツルはとても長い」「芋にもいろいろな形がある」などの発見があった。

事例２　「運動会の縄跳びに向けての取り組み」

運動会に向けて縄跳びが“もっと回数を跳べるようになりたい”と挑戦したり、“大縄の中で短縄跳びをやろう”と一人ひとりが目標をもって取り組んでいた。また友達と「何人まで入って跳べるか」「一緒に数を数えよう」と意見を出し合い、「こうやって回すと跳べるよ」「もっと足を上げて跳んだほうがいい」など教え合い、跳べた時は達成感を一緒に喜びあっている。

【保育者のかかわりのポイント】

【話を聞く】
- 保育者の話を最後まで聞くことが遊びや生活を進めていく上でとても大切であり、また、友達の話も最後まで聞かないと考えや理由がわからないことに気付かせる。
- 保育者が話をする時は、必ず全員の聞く姿勢が整ってから始めるようにする。

【生活の中で、数・形の感覚を身につける】
- 今日は何月何日か、運動会まであと何日か、などカレンダーや行事予定表を見ながら話しかけ数字を読むことや、順番を知ることに興味・関心が高まるようにする。
- 物を配る時など必要性を感じながら、子どもが数を数える機会をつくる。
- どんぐりや落ち葉を拾ったり芋掘りをした経験の中で、数を数えたり形や大きさの違いに気付き、対象物に十分関わり、特徴を知るようにする。

【文字・数字への興味関心を広げる】
- 室内に『あいうえお』の文字表を貼り文字を確認したり、かるたやトランプなどの遊びを通して文字・数字に親しんだり、遊びの中で自然に興味が持てるようにする。
- 「数字のうた」「カレンダーマーチ」の歌や数に関わる手遊びなどを通して数への興味を広げる。

【遊びの中で、数や形を学ぶ】
- 玉入れやリレーなど遊びの中で人数を確認し調整したり、得点を付けるなどして数を学ぶ。
- 積木の構成や空き箱製作、影絵、紙版画など、様々な素材・教具・遊具を使い、物の形や仕組みに気付き遊びに活かせるようにする。

～就学への滑らかな移行を目指して～

保育園での生活と小学校での生活の間には子ども達が成長していくために必要な「段差」があります。保育園の子ども達が小学校入学に抱いている期待と憧れを大切にしつつ、子ども達自身が幼児期に身につけた自分の力で「段差」を乗り越えていってほしいと願っています。そのためには、保育園での生活や遊びの中での興味や関心に沿った活動から、徐々に興味や関心を生かした学びへ、そして教科を中心とした学習へと段階的な成長につながるよう保育園と小学校が共に子どもの育ちを支え合っていくことが大切です。

【経験したい内容】

〇小学校一年生との交流。（ランドセル体験・給食体験）
　保育園で一緒だった児童と共に行動することで、楽しさや期待感が身近になる。
〇小学校五年生との交流。
　就学前検診の際、学校案内等をしてくれる児童と触れ合う機会を持つ。
〇他の学年との交流（ゲーム・集団遊び等）
　交流を通し、学校の雰囲気を知る。お世話をしてもらうことで、安心感を持つ。
〇学芸会、展覧会への参加。
　作品や劇を見ることで、小学校への期待や憧れを持つ。
〇交通ルールや公共の場でのマナーなど体験を通して知る。

〇小学校教諭と保育者の交流。
　小学校および保育園での生活や子どもへの接し方等の意見交換、情報交換をする。
〇年長児クラスの懇談会にて、学校長に５歳児の保護者に向けて話をしてもらう機会をもつ。
　通学や、小学校生活の中で、保護者が心配なことなどを直接聞く機会をもつ。

- 家を出る時間から考え、身支度、朝食、起床、就寝と子どもにあった生活のリズムをつくり、４月以降の生活に体が順応できるよう準備する。
- 保護者の見守りの中で、翌日の持ち物を準備する。また、自分の物の管理ができるようにする。
- 日常生活の様々な場面で、保護者自身が家族や身近な人に積極的にあいさつをしたり、「ありがとう「ごめんなさい」が言葉で伝えられるようにしていく。
- 子どもの話にゆっくりと耳を傾ける時間を作ってもらい、子どもが聞いてもらったうれしさを感じられるようにする。
- 家庭内で、約束事を決めて守れるようにしていく。
- 子どもが興味をもって試したり、工夫したりする姿を大切にし、自分で試せるような時間や場をつくる。
- メディアや本からの情報に偏らず、体験を通しての気付きや学びを大切にしていく。
- 結果の評価ではなく、取り組む過程の大切さや楽しさに子どもが気付けるような関わり方をする。
- 失敗した時には、なぜそうなったかを子ども自身が気付けるような助言をおこない、次への意欲が持てるように励ましていく。
- 親子で家事や運動、自然に触れるなど、一緒に過ごす中で子どもの気持ちに気付く。
- 登校への道を覚えるだけでなく、学校への親しみや期待が持てるよう入学前に繰り返し学校への道を歩いてみる。

【特別支援保育】

保育園における特別支援保育は、支援が必要な子どもを理解して関わり、その子を含めたクラス全体の保育を考えることが大切です。日々の生活や遊びを通して支援の必要な子とクラスの他の子どもをつなぎ、お互いに認め合いながら共に育つことを大切にしています。保護者に対しても“子育ての伴走者”として、子育ての不安を少しでも軽減できるような援助を行い、すべての子どもが共に健全な発達が図れるように保育を考え、子どもの育つ環境を整えていく役割を担っています。

事例　「友達のしていることに興味を持ち、一緒に活動することを楽しむ」

発表会に向けた総練習の朝、登園した子ども達が役の衣装に着替える中、おもちゃで遊び続けていたDに「Dちゃん、総練習が始まるからリスさんに変身しようか」と早めに声を掛けるが「今はいやだ。あとで」と言う。Dの役であるリスの帽子をかぶれば気持ちも変わるのではないかと思い、その時はそれ以上声を掛けずに様子を見ることにした。開始の時間が近づき周りの子が動物の帽子をかぶり始めると、遊んでいた手を止めてDがその様子を見ている。しばらくすると「着替えるの！」と言い、保育士に手伝ってもらいながら着替え始め、友達と一緒に列に並ぶ。前日まで欠席していた為、練習にあまり参加できなかったDが、いつもとは異なる雰囲気の中でどの様な姿を見せるか担任も不安であったが、友達と一緒に座り、登場し、セリフも動きも覚えていて楽しそうに参加していた。終了後、「劇やったんだ。おもちゃのチャチャチャもうたったんだ」と、うれしそうに言うDに「上手にできたね。みんなと一緒にできて楽しかったね」と声を掛けると、「やったー！」と喜び、他クラスの保育士からも声を掛けられてうれしそうであった

【保育士のかかわりのポイント】

友達のしていることに興味が向き、同じようにやってみようとする気持ちの芽生えを感じた場面であった。初めての事や普段と異なる雰囲気に対して抵抗を示す姿もあるが、子どもが興味を持てるもので誘ったり、タイミングを逃さずに声を掛けながら、少しずつ周りの状況を見て参加出来るようにしていく。子どもに「～をさせる」保育ではなく、子ども自身が「～をする」という気持ちになるような援助を行い、“やってみたい”“一緒に活動することが楽しい”と感じられる経験のきっかけを作っていく。その経験の積み重ねによって子どもが自信を持ち、様々な刺激を受けながら友達との関わりをより一層広げていけるようにしていく。

事例　「好きな遊びを見つける」

園庭で走るＡを保育士が「まてまて～」と追いかけるが、初めのうちは気にとめることなく行きたい方へと走っていく姿があった。繰り返し同じ遊びをしていたある日、走っていたＡが立ち止まって振り向き、保育士の顔を見る。Ａと視線が合ったため、再度「まて～」と声をかけると表情が笑顔になり、再び走り始めた。これがきっかけとなり、保育士が追いかけ遊びを働きかけると離れた場所から両手を挙げてアピールし、追いかけられることを楽しむようになった。保育士とＡが楽しんでいる姿を見てクラスの友だちも仲間入りしてくるようになった。「つかまえた」と友だちが抱き着くと笑顔を見せて立ち止まり、友だちの手が体から離れるとまた嬉しそうに走り出し、追いかけ遊びを繰り返し楽しむことができた。

【保育士のかかわりのポイント】

遊びが広がるようにとの保育士の思いから感触遊びなどを中心に誘っていったが、すぐにその場を離れてしまう。しかし園庭での追いかけ遊びをきっかけに、保育士との遊びが楽しめるようになり、声かけにも応じる姿が増えた。子どもの意思を大切にしながら好きなことや興味のあることを基盤にして遊びを広げていく。保育士が遊びの楽しさを子どもと共感することで他の子どもにも楽しさが伝わる。保育士はつい友だちと関わらせようと思いがちだが、遊びを魅力あるものにすることで周りの子も自然と集まってくる。そこから保育士が子ども同士の関係をつなぎ、遊びを広げていく。

【まとめ】

- 仕草や行動、発声や発語を見逃さず子どもの姿をとらえ、担任だけでなく職員全体で子どもの姿を共通理解し、同じように対応、援助していく
- 子どもの発達を知り、遊びの中でどのような関わりならお互いに楽しめるかを見極め、遊びを通して子ども同士をつなぐことが保育士の役割である。
- 子どもの尊厳を大切にした保育をしていく。（生活年齢を大切にした関わりと、発達年齢を考慮した関わり）
- 保育園での“楽しい”“嬉しい”等の経験や、友だちの遊びや姿が刺激として子どもに伝わっていくため、集団の中で友だちと一緒に過ごすことが大切である。
- 保育園は友だちとの関わりを作る場（共同体）であり、特別支援児が得意なことや、好きな遊びを通して、友だちが認めたり興味を持って参加してくる。そこから友だちとの関わりが生まれ、遊びが広がる。

【食　　育】

「食育」とは、食に関するすべての事柄です。中でも子ども達に最も関わり深いのが毎日の給食です。子ども達にとって、空腹を満たすだけでなく心を満たし、楽しみで興味深いものであって欲しいと思います。

事例　「食材を身近なものに感じ、興味を持つ」

空豆のサヤは２歳児クラスの子ども達には固く、初めのうちは「できない～」と言っていたが、力の入れ方がわかると「あ、まめみえた！」と嬉しそうに豆を出している。そばで見ていた保育士が、「先生もやっていい？どうやってとるの？」と聞くと、「えーっとね、こうやって・・・」と自信満々に教えてあげている。おやつの時には「〇〇くんがむいたの、これかな」と話しながら食べている。旬が短い食材は目にする機会も少ないため、子ども達は敬遠しがちになる。調理する前の形に触れることで、その食材を身近に感じ、興味を持つきっかけになった。

【かかわりのポイント】

食材にはその時期にしか手に入らないものもあり、例えばモロヘイヤやおかひじき、八つ頭など、子どもにはあまり馴染みがない食材もある。家庭で食べる機会が少なくなった今だからこそ、調理前の食材に直接触れ、匂いや大きさ、感触、重さなど五感すべてを使って感じることを大切にしている。そこから親しみがわき、「どうなっているのかな」という興味や関心「食べてみたい」という意欲を引き出すと共に、旬の食べ物には体に良いことがたくさんあることを知らせていく。

事例　「作物を育てる過程を知り、食べ物を大切にする気持ちが育つ」

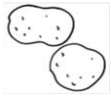
３ 歳児がクラスで小松菜を育てている。水やりも忘れず、「大きくなあれ」と世話をしているが、育っていくうち、葉に虫食い穴が…。「青虫いたよ～！」と子どもが発見しては保育士と一緒に取っている。見つけそこなうとあっという間に葉脈だけになってしまうほど食欲旺盛な青虫。子ども達からは「あ～あ！」とがっかりする声も聞かれたが、みんなの頑張りでなんとか収穫でき、おかか和えで食べることが出来た。普段野菜が苦手な子どもも嬉しそうに食べていた。

【かかわりのポイント】

毎日の世話をしながら作物を育てる中で、うまく育たないことを経験したり、最後まで世話をすることで食べ物を大切にする気持ちを育んでいく。栽培には収穫という楽しみがあり、どの状態になったら収穫するのか、どのように料理して食べるのかを自分達で考えながら、調理法や味付けを知る良い機会にしていく。

事例　「調理をすることや作っている人に興味を持つ」

５歳児クラスの子ども達がピーラーや包丁を使ってカレー作りをした時のこと。「包丁は猫の手、親指を中に入れる」と言って真剣に取り組んでいる。玉ねぎを切っている時は涙を流しながらも「玉ねぎがないとおいしくないんだよね」と言いながら頑張って切っている。栄養士がカレールーを作るところを見せると、「こうやって作るんだね」「うちのカレールーは四角だよ！」「いいにおいがしてきた～！」と沢山の声が上がる。「今までで一番おいしい」と嬉しそうにカレーライスを食べた。



【かかわりのポイント】

幼児クラスでカレー作りをすると、子ども達からは「楽しかったけど、なんだか疲れた」という声が上がることがある。楽しい経験だが、大変さにも気づくこともある。そのような時「おうちの人や調理の先生は毎日こうやってみんなのご飯を作ってくれているんだよ」という大人の声掛けで、普段料理を作っている人の顔を思い浮かべ、興味を持ったり感謝の気持ちへとつなげるようにする。

事例　「伝統行事と食文化を知る」

節分の日に鰯（イワシ）の蒲焼がでた時のこと。栄養士が「鬼は鰯の匂いが嫌だから“やいかがし”を作って保育園に入ってこないようにしたけど、この鰯を食べると心の中の鬼も逃げていくよ」と子ども達に話すと真剣な顔で聞いている。ヒイラギの枝に鰯の頭を刺した“やいかがし”を見せると「うわっ！くさい！」「この葉っぱ痛い」と言いながらも興味津々で見ていた。

【かかわりのポイント】

もちつきや十五夜のお月見団子など、自分達が経験しながら文化に触れる機会を取り入れている。また、正月のおせち料理、冬至やひな祭りなどでその由来を伝えるなど、食を通して日本の伝承行事に関心をもち、大切にする心を育てていく。

事例　「食品の働きや、素材を知る」

食品が体にどのように働くかを赤、黄、緑のグループに分けた「３色の栄養」について、５歳児クラスの子ども達に話しをする。それぞれのグループにはどういう食品があるかパネルをクラスに置いておき「朝ごはんに何色が入っていた？」と聞くと、「朝ごはんに牛乳飲んだから赤と、パン食べたから黄色もあるよ」と答えている。次の朝、「先生、今日はみかん食べたから緑もあるよ」と栄養士を見つけると早速知らせてくれた。

【かかわりのポイント】

パネルシアター、ペープサート、紙芝居、絵本などの教材や食材を利用し、自分の体を作る食べ物に少しずつ興味関心を持てるようにする。栄養士が行う栄養指導で終わりではなく、保育士が給食の中で話題にするなど、日々の保育につなげていくことを大切にする。

≪まとめ≫

食育が、より有意義なものになるよう栄養士、保育士、調理師、用務、看護師、すべての職員が共通認識を持つことが大切である。意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、自然の恵みとしての食材や、調理する人など、食に関わるすべてのものに興味を向けて、その大事さがわかり、感謝の気持ちが育つように全職員で関わっていく。

【 健康教育 】

子ども達が健康で過ごすために、自分の体に興味関心を持ち、自分のことを大切にし、健康について自分で考え行動できる力を育むことを目的として健康教育を行っています。

事例　「心身の発達をはかり体力増進に努める」

生後９か月で入園する。保護者からは「お座りはできます」と聞いていたが、自力での座位は不安定で、寝返りもできないことがわかった。うつ伏せにすると自力で顔を上げられず、仰向けも嫌がり、座っている姿勢以外は泣いている状況だった。泣かないことを優先すると座らせてしまう状況があったので、看護師は保育士と話し合い、本児の寝返りの獲得を目標にして泣かずに仰向けで過ごせるように遊びを工夫したり、保育室の環境を見直し十分に体を動かせるような環境にした。また同じ関わりができるように職員間で情報を共有し、保護者にも伝えていった。

【関わりのポイント】

看護師はクラスを巡回し、子どもの発達や様子を把握するようにしている。保育士や保護者との連絡を密にし、心身の健康状況を確認することが大切である。月４回の０歳児の園医健診や月１回の身体測定などで園医や保育士と健康状態や成長発達の情報を共有している。また発達を促すために、マッサージを取り入れたり、心身の発達を図り、体力の増進に努めることが大切である。

事例　「安全を保障し、事故(ケガ)防止に努める」

小さな怪我が続いていたので保育士と相談して、５歳クラスの子ども達と一緒に、怪我をしないようにするにはどうすればいいかを考える機会を作った。紙芝居の中の扉に指を挟んでいる子の絵を見せると、「指の骨が折れちゃうかも」「ドアを閉めるときは、周りをよく見てそーっと閉めるんだよ」という意見が出る。その後、危険な場面を絵で示した安全かるたを作成し、クラス全員でかるた遊びをする。遊びを通じて、楽しく日常の危険やルールを守ることの大切さについて学ぶことができた。玄関にかるたの絵と文言を掲示すると、親子で立ち止まり、子どもが安全かるたの説明をしていた。

【関わりのポイント】

子どもの発達、環境面の配慮など、職員全体で連携をとりながら事故防止に努めていくことが大切である。園舎内外の安全点検、ヒヤリ・ハットの検証をもとにケガにつながらないよう配慮している。また日々の保育の中で保育士と共に自分の体を支えられる支持力をつけるなど、子どもの発達を促せるような活動を考えることが大切である。安全教育をすすめる中で子ども達に『あぶない　きけん』の紙芝居や『安全かるた』などで、危ないことは何か、どんな時に怪我をするかを遊びの中で楽しく学ぶことを大切にし、子どもが自ら考えられる機会になるようにしている。

事例　「疾病の早期発見と感染予防に努める」

５歳児の子ども達は園庭から帰ってくると、保育士に声を掛けられなくても手は洗っているが、看護師が「ちゃんと洗えてるかな？」と声を掛けると慌てて手を洗い直している。子ども達の手洗いについて、保育の中で手の洗い方の確認とブラックライトを使い、手洗いのチェックをしてみた。ブラックライトを当てると汚れが残っている部分が光り、子ども達から「つめが汚い」「こんなにバイキンがついてる」と驚いたり、「バイキンがお口からはいるんだよね。」と納得している。看護師と一緒に丁寧に手を洗い、きれいになった手を見せてくれた。

【関わりのポイント】

子どもの心身の健康維持と増進や保護者支援を行うために、看護師は日頃から子どもの健康管理や保護者との信頼関係を作り、小さな体調不良に気づき疾病の早期発見に努めるようにしている。子どもが自分の体に興味関心を持ち、健康のために自分で考えて行動できるように、看護師は保育の中で健康教育を取り入れ実践している。また保護者に対して積極的に予防接種の啓発や感染症流行の情報提供などを行う。看護師協議会で発行している年２回の保健だよりは、保護者や保育者に向けて「子ども達の健康に関する情報」や「病気予防、体づくり」について、わかりやすい内容で提供していく。

事例　「保健衛生上の良い習慣が身につくように努める」

保護者から夜寝る時間がどんどん遅くなってしまい、朝起きれないと相談を受けた。看護師はクラスで紙芝居「元気な５人の仲間たち」を見せ、子ども達に早寝・早起きの大切さを伝えた。翌日、看護師がクラスを回ると子ども達から「今日は自分で起きたよ。」と教えてくれ、保護者からも「今日は自分から起きてきました。」との声が聞かれた。

【関わりのポイント】

子ども達が良い生活習慣を身につけるためには、保護者の協力が必要である。看護師は視診や連絡ノート等で家庭での様子を把握し、園での様子と合わせながら状況把握をしていくようにしている。職員と連携し保護者に寄り添い理解を求めていくことが大切であり、子ども達にも「やってみよう」とする意欲につながる健康教育を考え、継続的な取り組みが必要である。看護師協議会の中で、手洗い、排便、体の仕組み、安全教育、歯磨き、耳と鼻、目の話、風邪予防についてなど 13 種類の健康教育教材を作成している。子ども達が健康で安全に過ごすために伝えたいこと、身につけてほしいことをわかりやすく伝わるように工夫して作っている。

≪まとめ≫

子どもの健やかな成長を促すためには、職員間で子ども一人ひとりの発達や状態を理解し、関わり方を共通のものにしていくことが大切です。子ども達が元気に登園し、毎日いきいきと保育園で過ごせることを願っています。

「目黒区全体の保育の質を高める基本的な取組み」

【保護者との連携】

保育園における保育は職員だけで行うものではなく、保護者とともに子どもの健全な成長を支えるという意識を持つ必要があります。そのためには、保護者に対し、適時適切に情報提供を行うとともに、保育参観や参加の機会を提供するなど、保護者に園の保育を知ってもらい、保護者と子どもの姿を共有して、子どもの育ちにつなげていく必要があります。

また、保護者からの相談に対応する体制を構築し、良好な信頼関係を築くことも円滑な園運営には重要です。

【取組みのポイント】

1　情報提供

- ○　園の保育方針や保育内容を保護者に分かりやすく説明し共有する。
- ○　園だよりなどを用いて、園の情報を適切に提供する。
- ○　連絡帳などの日常の連絡方法や緊急時の連絡体制を整える。
- ○　保護者会や保護者面談を適切な頻度で実施する。
- ○　第三者評価、利用者アンケートを行い、その結果について保護者に情報提供を行う。

2　保護者の保育への参加

- ○　保護者の子育てに関する悩みなどの相談体制を整える。
- ○　保育参観や保育参加など保護者が園の保育に触れる機会を適切に提供する。
- ○　園運営に関する保護者の意見を募る仕組みを整える。

【地域交流】

保育園は地域の子育て支援の拠点として「地域の子どもを育てる」という意識を持ち、地域の人々に子育てを理解してもらえるよう、情報発信を行うとともに、地域の子育て世帯への支援を行う役割があります。

また、地域に開かれた保育園として、町会・自治会や住区住民会議、地域の高齢者施設や小学校など異世代との交流を図っていく必要があります。

【取組みのポイント】

1　子育て支援

○　地域の子どもを育てるという意識を持ち、子育てに関する情報発信を行うとともに、地域の実情に応じた子育て支援事業を行う。

○　地域で子育てをしている保護者の相談を受けるほか、子育て世代の交流の場を提供する。

2　地域との連携

○　日頃から民生委員、児童委員との連携を図り、情報交換、交流を行う。

○　地域団体の行事に積極的に参加するなどして地域での交流を促進する。

○　近隣の小中学校や高齢者などと世代を超えた交流を促進し、世代をつなぐ役割を担う。

○　就学後の環境の変化に適応できるように学童保育クラブや児童館と交流の機会をつくる。

3　虐待防止

○　保護者の育児不安等が見られる場合は支援し、保護者に不適切な養護または虐待が疑われる場合には子ども家庭支援センターなどの関係機関と連携し適切な対応を図る。

【危機管理】

子どもは遊びを通して身体的・精神的・社会的に成長します。その成長・発達過程で環境に対してさまざまな働きかけを行い、学習しています。しかし、子どもの行動は安全に対する認識が未然であり、判断力も十分でないために、様々なリスクもあります。

保育園職員は子ども一人ひとりを十分に理解し、また年齢発達に合った環境や保育の内容を準備した上で、子どもの行動の予測を立てながら保育を進め、事故の予防や災害時の対応などに保育園全体で取り組む必要があります。

【取組みのポイント】

1　事故防止

○　環境整備（園舎、玩具、遊具）を組織的、計画的に行う。不備や危険を発見したときは速やかに園内で情報共有するとともに適切な整備を行う。

○　事故が発生した際の役割と連絡体制を確立する。

2　防災、防犯対策

○　災害対策、不審者対策などのマニュアルを整備し、非常時の体制を整える。

○　避難訓練や消火訓練などの各種訓練を定められた頻度、内容で行う。

○　災害時等の保護者への一斉連絡の手段を整える。

3　個人情報の保護

○　個人情報保護マニュアルを整備し、日頃から職員の守秘義務についての認識を高め十分な自覚を持ち保育を行う。

○　保育において必要とする園児の名前の掲示や記載、ビデオや写真の撮影については必ず保護者に確認する。

【健康管理】

園児の健康に関する危機管理は、疾病や事故の予防及び防止から発生時まで広い範囲に及びます。

園児は年齢によって罹りやすい病気があり、重症にもなりやすく、また、集団生活により、病気が感染しやすい状況に置かれています。

疾病予防は、子どもの年齢、既往疾患、健康状態などに配慮した対応が必要です。

病気や事故が発生したときは、保護者、関係機関と連絡を取る必要があります。保育園ではこのような特徴を踏まえ、危機管理にあたらなければなりません。

【取組みのポイント】

１　予防対策

○　衛生管理マニュアルを整備し、内容について職員全員が共通認識を持つ。

○　子どもの病気の特徴を捉え、園児一人ひとりの健康観察を適切に行う。

２　疾病対処

○　健康状態に変化があったときは症状に応じたケアを行う。状況に応じて保護者、医療機関に連絡し連携をとる。

○　緊急を要する（ＳＩＤＳ、アナフィラキシーショックなど）場合は救急車を要請する。

３　感染症対策

○　予防接種の接種状況を把握し、感染症の蔓延を予防する。

○　感染症の疑いのある園児は個別保育を行い、保護者に受診を依頼する。

○　感染症対策マニュアルを整備し、感染症が発生した場合の対応について園内で共通認識を持つ。

【運営事業者の取組み】

質の高い保育を実現するためには、保育園運営の理念や方針が具体的に示され、全ての職員がそれを理解し、園が一丸となって、保育の質を向上する取組みを行うことが重要です。

また、職員の配置基準の遵守は必須であり、そのためには、明確な職員採用の考え方のもと、計画的に職員を採用するとともに、人材育成に努めなければなりません。同時に、職員の働きやすい環境を整え、健康管理を含め、処遇改善を推進していく必要があります。

【取組みのポイント】

１　保育理念、運営方針

○　保育園運営の理念や方針を明確に示し、職員が共通認識を持つ。

○　保育の質の向上のための取組みを具体的に示す。

２　職員の配置

○　職員採用の具体的な考え方を明確にし、採用計画を策定する。

○　職員の急な退職等による欠員への対応策を講じる。

○　採用時には職員の雇用条件を明確に伝えるとともに就業規則を適切に備える。

３　職員の育成

○　人材育成の理念を明確にし、研修計画を策定する。

○　職員が研修に参加できる職場環境を整える。

４　健康管理

○　日常的な健康管理に対する考え方を整理し、健康状態を把握する計画を策定する。

○　職員の様々な相談を受ける体制を整える。

令和元年 10 月　　発行

発行　　目黒区子育て支援部保育課
　　目黒区立保育園
イラスト　　横嶋　博美